愛媛県松前町横田遺跡Ⅲ区調査報告書

平成７年（1995）10月

愛媛県伊予郡松前町教育委員会

愛媛県松前町横田遺跡Ⅲ区調査報告書

平成７年（1995）10月

愛媛県伊予郡松前町教育委員会

西からみた横田遺跡Ⅲ区全景

序　　文

松前町は、松山平野の南部に位置し、西に豊かな瀬戸内海に面し、東は霊峰石鎚山を望む重信川氾濫原に開け、古来より海上交通の要衝として、発展して参りました。

今回、農道改良工事に伴い、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を、松前町教育委員会が実施しました。

本調査は、猛暑に見舞われ、周辺市町村では断水という過酷な時期の調査にも関わらず、関係機関や地元の方々に多大なご協力をいただいたことに対し、ここに厚くお礼申し上げ、調査関係各位の御労苦に感謝申し上げる次第であります。

本報告書は、皆様の御期待に十分添い得ない面もあるかと存じますが、古代文化の解明の一助に御活用いただければ幸いに存じます。

併せて、今後の埋蔵文化財の保護保存について、一層のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成7年10月

松前町教育委員会

教育長　満田　泰三

例　　言

1　本報告書は、愛媛県伊予郡松前町大字横田字中窪の、町道建設予定地内に所在した横田遺跡Ⅲ区の発掘調査報告書である。

2　本遺跡の発掘調査は、松前町教育委員会が計画し、実施したものである。

3　発掘調査期間は、平成6年7月20日から8月30日までであった。

4　出土遺物の洗浄並びに注記は、平成6年9月3日から10月10日までおこない、報告書の作製は、平成6年10月15日から平成7年5月5日までの間におこなった。

5　発掘調査は、下記の調査員が担当した。

調査員　長井　数秋　　（伊予農業高等学校教諭、日本考古学協会会員）
　〃　　西岡　信次　　（松山聖陵高等学校教諭）

6　現地での写真撮影と測量は西岡と長井がおこなった。

7　遺物の整理は長井が、写真は西岡がおこなった。

8　遺物の実測、トレースは長井がおこなった。

9　報告書の執筆は西岡と長井が、編集は長井が担当した。

10　発掘調査にあたっては下記の人々の参加、協力を得た。伏して感謝の意を表したい。

大竹　浩史　　釣　　哲之　　山田　昌範　　阿部　敏雄　　仲神　綾子
金井　裕司　　八田　孝志　　神田　好仁　　内山　真臣　　欄所　　茂
西村　美代子

11　発掘調査に係る組織は下記の通りである。

松前町教育委員会

教　育　長	満田　泰三	
社会教育課長	国田　竹孝	
社会教育課長補佐	井上妙一朗	
生涯学習係長	吉岡　義徳	
社会教育主事	大政　哲志	坂井　清美

本文目次

Ⅰ　序説 ---------- 1
〔1〕発掘調査に至る経緯と経過 ---------- 1
1　発掘調査に至る経緯 ---------- 1
2　発掘調査日誌抄 ---------- 1
〔2〕遺跡周辺の環境 ---------- 4
1　遺跡の位置と周辺の環境 ---------- 4
（1）遺跡の位置 ---------- 4
（2）遺跡周辺の歴史環境 ---------- 5
Ⅱ　遺跡の概況と調査結果 ---------- 5
〔1〕遺跡の概況 ---------- 5
〔2〕堆積層序 ---------- 9
〔3〕発掘調査の結果 ---------- 9
1　第2層出土の須恵器 ---------- 10
2　住居址と出土遺物 ---------- 10
（1）1号住居址 ---------- 10
（2）住居址内の遺物の出土状況 ---------- 12
（3）住居址内出土の遺物 ---------- 13
①縄文土器 ---------- 13
②弥生土器 ---------- 14
③石器 ---------- 16
3　1号溝状遺構と出土遺物 ---------- 20
（1）1号溝状遺構 ---------- 20
（2）1号溝状遺構内の遺物の出土状況 ---------- 20
（3）1号溝状遺構出土の遺物 ---------- 21
①弥生土器 ---------- 21
②石器 ---------- 23
4　2号溝状遺構と出土遺物 ---------- 24
（1）2号溝状遺構 ---------- 24
（2）2号溝状遺構の遺物の出土状況 ---------- 25
（3）2号溝状遺構の出土遺物 ---------- 25
①弥生土器 ---------- 25
②石器 ---------- 25
5　土坑状遺構と出土遺物 ---------- 26
（1）土坑状遺構 ---------- 26
（2）土坑状遺構内の遺物の出土状況 ---------- 26

（３）土坑状遺構内の出土遺物 ---------- 26
６　３号溝状遺構と出土遺物 ---------- 26
（１）３号溝状遺構 ---------- 26
（２）３号溝状遺構内の遺物の出土状況 ---------- 28
（３）３号溝状遺構内の出土遺物 ---------- 28
①弥生土器 ---------- 28
Ⅲ　総括 ---------- 28

図　目　次

図－１．横田遺跡Ⅲ区位置図 ---------- 2
図－２．横田遺跡Ⅲ区平・断面図 ---------- 6
図－３．第２層出土の須恵器実測図 ---------- 9
図－４．出土の住居址平・断面図 ---------- 10
図－５．住居址内の土器の出土位置 ---------- 12
図－６．住居址内の石器の出土位置 ---------- 13
図－７．住居址内の縄文土器実測図 ---------- 13
図－８．住居址出土の弥生土器実測図 ---------- 15
図－９．住居址出土の石器実測図（１） ---------- 17
図－10．住居址出土の石器実測図（２） ---------- 18
図－11．住居址出土の石器実測図（３） ---------- 19
図－12．１号溝状遺構平・断面図 ---------- 20
図－13．１号溝状遺構の遺物の出土位置 ---------- 21
図－14．１号溝状遺構内出土の弥生土器実測図 ---------- 22
図－15．１号溝状遺構内出土の石器実測図 ---------- 23
図－16．土坑状遺構と２号溝状遺構と地層断面図 ---------- 24
図－17．２号溝状遺構並びにその周辺出土の石器実測図 ---------- 25
図－18．土坑状遺構出土の石庖丁状石器実測図 ---------- 26
図－19．３号溝状遺構と地層断面図 ---------- 27
図－20．３号溝状遺構の土器片の出土位置 ---------- 28
図－21．伊豫市片山遺跡Ⅰ区出土の弥生前期の土器実測図 ---------- 30

図　版　目　次

図版　１．住居址内の遺物の出土状況 ---------- 34

図版 2．住居址内の遺物の出土状況 ---------- 35
図版 3．住居址内の遺物の出土状況 ---------- 36
図版 4．住居址内の石器出土状況 ---------- 37
図版 5．住居址西部 ---------- 38
図版 6．住居址内の主炉址 ---------- 39
図版 7．住居址と１号溝状遺構 ---------- 40
図版 8．１号溝状遺構 ---------- 41
図版 9．１号溝状遺構の遺物の出土状況 ---------- 42
図版10．２号溝状遺構と土抗状遺構 ---------- 43
図版11．２号溝状遺構中の人の足跡 ---------- 44
図版12．土抗状遺構と ---------- 45
図版13．３号溝状遺構 ---------- 46
図版14．３号溝状遺構の人の足跡 ---------- 47
図版15．住居址出土土器 ---------- 48
図版16．住居址出土の土器と石器 ---------- 49
図版17．住居址出土の石器 ---------- 50
図版18．住居址出土の石器 ---------- 51
図版19．１号溝状遺構の土器と石器 ---------- 52
図版20．１号～３号溝状遺構の土器と石器 ---------- 53
報告書抄録 ---------- 54

Ⅰ　序　　説

〔1〕発掘調査に至る経緯と経過

1．発掘調査に至る経緯

平成6年5月、松前町福祉課より松前町教育委員会に対して、伊豫市下三谷片山から松前町横田素鵞神社前に至る幅員6mの道路建設計画が示された。松前町教育委員会は、この建設予定地が、周知の横田遺跡や片山遺跡に接することから、福祉課と協議をおこなった。協議の結果、該当地区内の埋蔵文化財の有無を確認するため、試掘調査を実施することにした。

松前町教育委員会は、日本考古学協会会員の長井数秋を担当者として、確認のための試掘調査をおこなった。まず、平成6年5月19日に松前町教育委員会と調査担当者が、道路建設予定地の現場での打ち合わせをおこない、同年5月21日に東西全長200mの間でT1からT6の6か所にグリットを設定し、松前町福祉課立ち合いのもと、試掘調査を実施した。

この結果、T5から柱穴とみられる遺構と土器片を検出した。このため、横田遺跡の一部がこの地に延びていることが確認された。

以上の試掘による確認調査報告書をもとに、松前町教育委員会は愛媛県教育委員会の指導のもと、松前町福祉課と協議し、発掘調査を実施することにした。発掘調査は横田遺跡第二次発掘調査が、平成6年7月から8月にかけて実施されることになっていたため、この調査に並行して、同時進行の形で発掘調査に着手することにした。

愛媛県経済農業協同組合連合会関係の発掘調査を、横田遺跡第二次発掘調査としたため、本当該地区の発掘調査を横田遺跡第三次発掘調査と呼称することにした。なお、横田遺跡第三次の発掘調査準備作業は、平成6年7月15日よりはじめ、本格的調査の着手は7月21日からで、8月31日に現場での調査を終えた。その後、整理作業を進め、続いて報告書作製作業を平成7年5月までおこなった。

2．発掘調査日誌抄

平成6年7月27日（水）晴れ

終日、表土層と第2層（灰褐色土）の除去をバックホーでおこなうが、暗渠排水溝からの出水で、排土困難。第3層は黄褐色粘土層で、横田遺跡第二次発掘調査地区と同じ。

7月28日（木）晴れ

前日に引き続いて、表土と第2層の土砂の除去。

7月29日（金）晴れのち曇

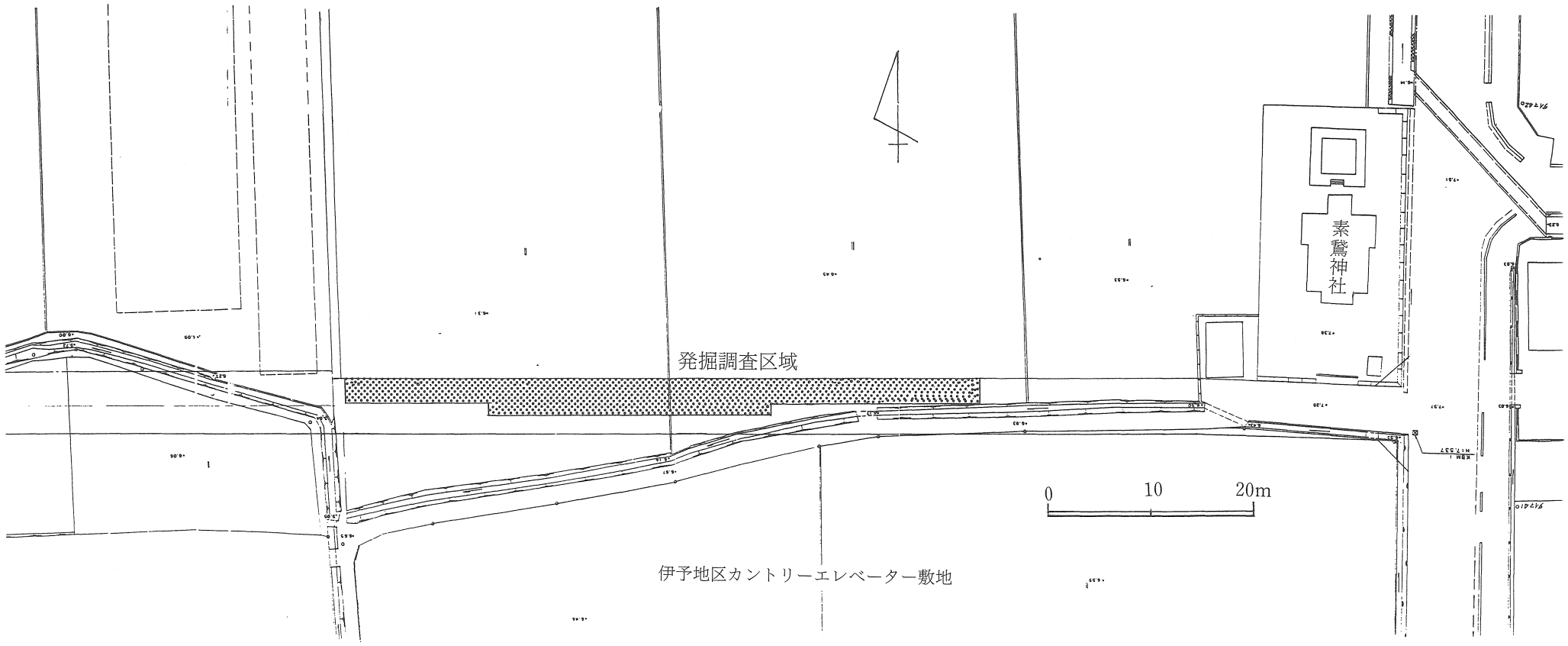
第2層下部の粘土を除去し、第3層の上面の精査をおこなう。

8月19日（金）晴れ

午前中、発掘地区の排水。午後も発掘地区の北部に溝を掘削して排水。

8月20日（土）晴れ

午後より西部の発掘調査に着手。西部の黒褐色土層の分布する地域の中央部に、「L」



図－1　横田遺跡Ⅲ 区位置図

字状の幅20 cmの小トレンチを設定して発掘をおこなう。深さ15 cmで黒褐色土層は終わり、第3層の黄褐色粘土層が顔を見せはじめた。

8月22日（月）曇時々晴れ

遺跡全面にグリットを設定し、西部の住居址とみられる部分の発掘に着手する。

8月23日（火）晴れ

Ａ1、Ａ2区と、Ｂ1、Ｂ2区の発掘をおこなうも、出土遺物は皆無に近い状態であった。Ｂ2区とＢ3区にまたがる土坑状の掘り込みを検出。Ａ1区とＢ1区の中央部をほぼ南北に走る掘り込みを検出。Ａ1区の掘り込みの床面上に、焼土を伴った焼けた工作台状の石が出土。Ａ4区とＢ4区を南北に走る掘り込み部分を検出。

8月24日（水）晴れ

Ａ3区とＢ3区の発掘をおこなう。多くの土器・石器が出土するも、そのほとんどが床面上10 cm～15 cmの範囲からの出土であった。

8月25日（木）晴れ

Ｂ9区・Ｂ10区・Ｃ9区・Ｃ10区の発掘をおこなう。Ｂ10区からＣ9区・Ｃ10区にかけて、南北に走行する浅い溝状遺構を検出。南部には小石による集石状遺構が認められた。浅い溝中には、不規則な足跡を多数検出。溝中から弥生前期の甕の口縁部が出土。

8月26日（金）晴れ

Ａ7区・Ｂ7区とＢ8区の発掘をおこなう。幅の広い1号溝状遺構を検出。溝は深さ10 cm～15 cmと浅く、ほぼ東西方向を指向し、床面上より弥生前期の甕の口縁や石錘、磨製のミニチュア石斧が出土。ミニチュア石斧は、床面上からの出土であるが、他の遺物は床面上10 cmからの出土であった。

8月27日（土）晴れ

Ａ6区とＢ6区・Ａ7区にまたがる1号溝状遺構を発掘。1号溝状遺構の西端床面上から、ほぼ完形の甕が出土。午後より1号住居址内出土の遺物の写真撮影。並行して測量を実施。

8月28日（日）晴れ

夜間中、揚水用ポンプ2台がともに故障し、発掘地区満水。午前中排水をおこなう。午後よりＢ7区からＢ11区にかけての測量を実施。

8月29日（月）晴れ

土坑と2号・3号溝状遺構中で検出した、足跡群の写真撮影と測量を実施。並行して遺構の清掃をしたのち写真撮影を実施。

8月30日（火）晴れ・8月31日（水）晴れ

遺構の測量と写真撮影。発掘資材の撤収をおこない、現地での発掘作業を31日に完了。

〔2〕遺跡周辺の環境

1．遺跡の位置と周辺の環境

（1）遺跡の位置

横田遺跡第三次発掘調査区を、便宜的に横田遺跡Ⅲ区と呼称することにしたい。横田遺跡Ⅲ区の絶対位置は、北緯33°46′23″、東経132°43′45″の交差する地域であり、行政位置は愛媛県伊予郡松前町大字横田字中窪であり、垂直的位置は標高6.3 mである。

横田遺跡Ⅲ区は、西は横田Ⅱ区と、南は横田Ⅰ区と接しており、時期的にみるとⅠ区の試掘地区に連続する同一遺跡の可能性が濃厚である。

（2）遺跡周辺の地質並びに地形

横田遺跡Ⅱ区の報告書を参照されたい。

2．遺跡周辺の歴史環境

これも横田遺跡Ⅱ区の報告書を参照されたい。ただ、本遺跡は弥生前期初頭に属するものであることから、松山平野南部の弥生前期遺跡の分布について若干補足しておきたい。

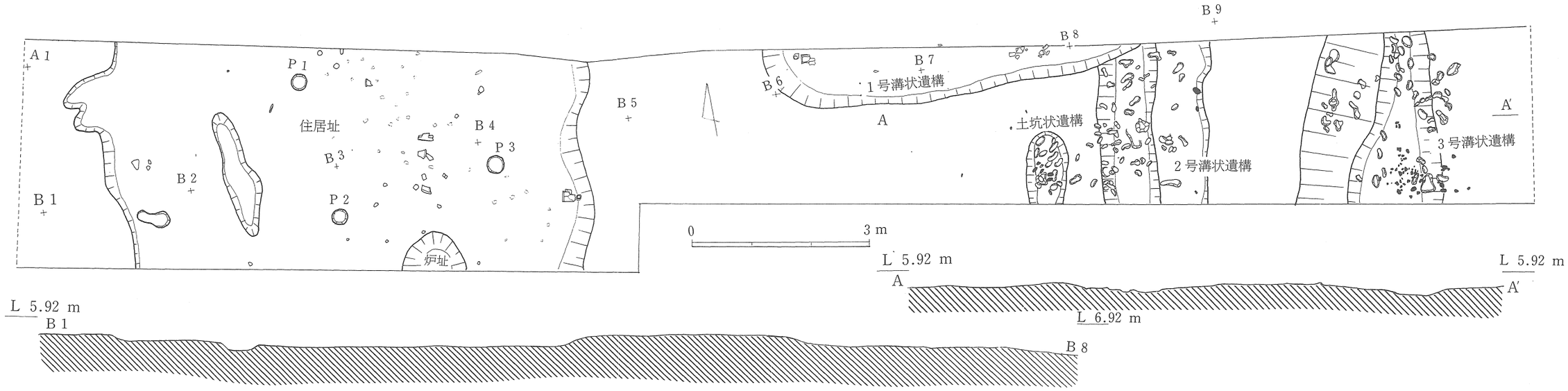
弥生前期に先行する明確な縄文晩期の遺跡としてあげ得るものはないが、本遺跡の南500 mの伊豫市下三谷片山遺跡Ⅰ区の土坑内から、晩期の深鉢が1点出土している。恐らく、近接する地域に晩期の遺跡の存在が想定される。本遺跡に最も近い前期遺跡としては、南300 mの地点にある伊豫市下三谷片山Ⅰ区の3号住居跡や、それに伴う3号土坑がある。土坑からは前期前半の重弧文をもつ壷や、有段、削り出し凸帯を有する甕や壷が出土している（註1）。横田遺跡Ⅰ・Ⅱ区と片山遺跡Ⅰ区がほぼ同時期の遺跡であることは、かなりの広がりをもった大きな一つの遺跡と捉えることができる。このほか、本遺跡より南800mの伊豫市下三谷北組にも前期前半の北組遺跡があるが、これ以外に現在までのところ前期遺跡は未発見である。重信川の支流である砥部川や御坂川流域には、西野Ⅲ・土壇原Ⅲ・Ⅴ遺跡など多くの前期遺跡が分布しており、なんらかの関係があるものとみられる。なお、遺跡そのものではないが、前期に属する有柄式磨製石剣が、松前町出作や伊豫市の寺山・雨ケ森などから発見されており（註2）、弥生前期は朝鮮半島や北九州地方との結びつきが強かった。

Ⅱ　遺跡の概況と調査結果

〔1〕遺跡の概況

発掘調査地域は、道路建設予定地内のうち、試掘によって遺物包含層が認められた地域に限定した。発掘調査範囲は東西長60 m、南北幅3 mで、遺物包含層が認められた地域の1区～4区だけは、南部を70 cmほど拡幅したので、発掘面積そのものは約270 m^2となった。西端の長さ15 mの範囲は遺構が遺存しなかったため、排水用のための溝と排水池を掘削した。東端の15 mの間も遺物包含層がなかったため、排水と揚水のための溝と排水池を設けた。

精査した地域は東西長30 m、幅3～3.5 mの範囲である。1区～4区の拡幅した西部には、東西長8 m、南北幅3.5 mの住居址とみられる遺構が遺存したが、南北両端は発掘地区外となっていたため未調査で、どのような遺構が分布しているのかは明らかでない。炉址並びに柱穴や掘り込みを検出したことから、住居址とみて間違いなかろう。ただ、完掘していない



図－2　横田遺跡Ⅲ区平・断面図

ので、平面プランを確定しにくいきらいがある。

住居址の東3.5ｍには、幅広く浅い１号溝状遺構が南北に走行し、溝床面上から各種の遺物が出土している。１号溝状遺構の南部には、長円形の土坑状遺構が１基検出されたが、南端の状態は不明である。その東側には浅い２号溝状遺構が南北に走行し、北端は１号溝状遺構によって切られている。２号溝状遺構の東1.5 ｍには、３号溝状遺構が南北方向に並行するように走行し、南端には川石の集石遺構が分布していた。土坑と２号・３号溝状遺構中には多くの人の足跡が残り、その中央部が微高地となって、足跡もないことから道のような遺構であったのかもしれない。

ただ、豊富な特色ある遺構や遺物が発見されているものの、あまりにも発掘面積が狭いため、遺跡の全貌を明らかにすることはできなかった。今回の横田遺跡Ⅲ区の南70ｍには、試掘で明らかとなった弥生前期の遺跡があることから、本遺跡もこれらの遺跡と深い関係があるとみるべきであろう。

〔２〕堆積層序

遺跡の標高は6.3ｍで、水田となっていたため表面は水平で、比高差は認められなかった。表土層である第１層は暗青灰色粘質土層で、厚さは薄いところで24 cm、厚いところで28 cmあり、平均25 cmの厚さで安定した状態で堆積していた。第１層中は無遺物層で、第１層を除去した第２層上面は、精査したにもかかわらず遺構、遺物は存在しなかった。第２層は地表からの深さが25 cmから30 cmであり、厚さは48 cm～50 cmで、緻密な灰褐色粘土層であった。上面には凹凸なく、極めて安定した堆積状態を示していた。第２層上面に遺構のないことはすでに触れたが、第３層中にも遺構、遺物は全く遺存していなかった。表土層、第２層に限っては、横田遺跡Ⅰ・Ⅱ区と同じ傾向の地層の堆積状態であった。

第３層の黄褐色粘土層は地表下73 cm～75 cmからはじまり、その深さは遺跡両端の排水池の地層からすると、地表下1.5ｍまで堆積しており、それ以下は明らかとなっていない。発掘地域の中央部には遺構は分布せず、この部分は第３層上に第２層が堆積している。遺構は第３層の黄褐色粘土を掘削して構築しており、この掘削した部分に黒灰色粘土が流入堆積していた。黒灰色粘土を除去することが、遺構そのものを検出することに繋がった。

西部の住居址（SB 01）上の黒灰色粘土は、平均して20 cmの厚さで堆積していた。東部の土坑や溝状遺構周辺では、遺構外にも数cmの厚さで黒灰色粘土が薄く堆積していた。

以上のことから、横田遺跡Ⅲ区においては、第３層の黄褐色粘土層の上面が生活面であったことが分かる。横田遺跡Ⅰ区・Ⅱ区では、この第３層の黄褐色粘土層上面が弥生後期の、Ⅲ区では弥生前期の生活面となっていた。

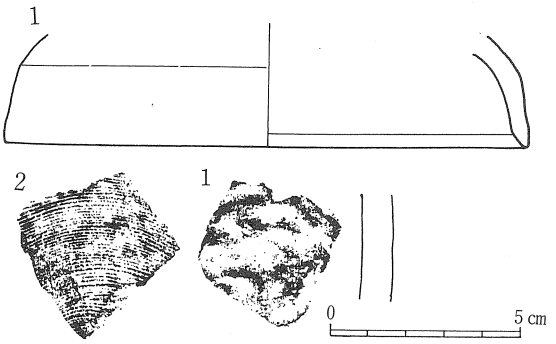
〔３〕発掘調査の結果

遺跡概況ですでに触れたとおり、横田遺跡Ⅲ区からは住居址１棟と溝状遺構３、土坑状遺

構１基と、それらに伴う遺物が発見されている。以下、それぞれについて説明を加えたい。

１．第２層出土の須恵器（図－３の１～２）

１はSB 01 上から出土した蓋坏の破片である。推定口径は 14 cmで、天井部は欠落して不明である。天井部と体部の境には弱い稜があり、口縁部は心もち外反ぎみに垂下している。口縁端内面は斜めに削られ尖っている。外・内面とも刷毛目調整され、色調は淡褐色で、稜付近には緑褐色の自然釉が付着している。２は提瓶の胴部の破片である。外面は同心円状の美しいカキ目をもち、内面は指圧痕が顕著に残存している。１・２とも細片であり、その所属時期を云々することは困難であるが、松山平野の須恵器編年（註３）からするとⅢ期３～４型式の可能性が認められる。



図－３　横田遺跡Ⅲ区第２層出土の須恵器実測図

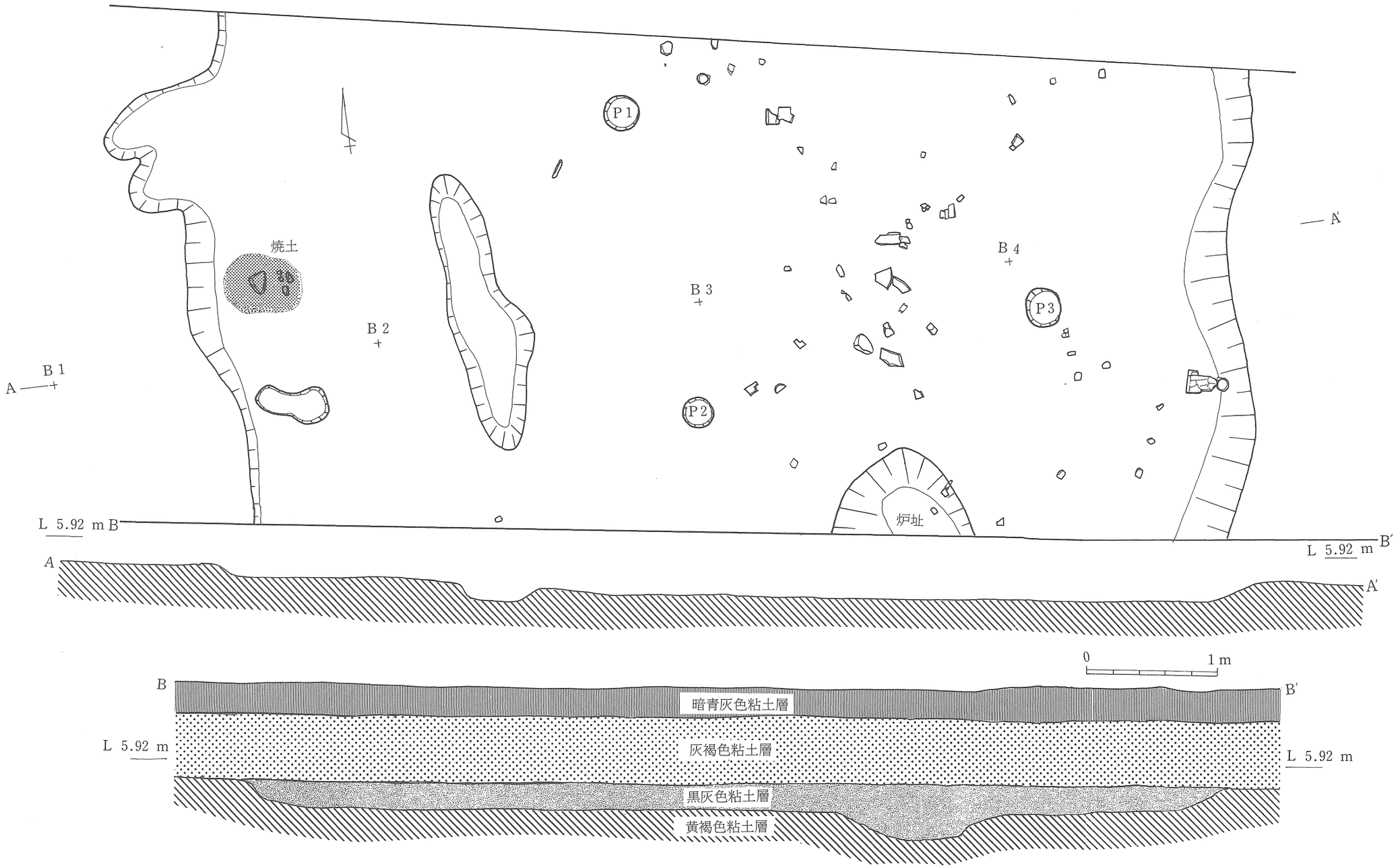
２．１号住居址と出土遺物

（１）１号住居址(SB 01)

住居址はＡ１区～Ａ４区からＢ１区～Ｂ４区にかけて遺存しており、住居址の西側の掘り込み法面幅は広いところで 22 cm、狭いところで 8 cm、深さは 10 cmである。掘り込みは中央部で造り出し状に突出している。東側掘り込み法面は幅 30 cmで、ゆるやかに傾斜するが、蛇行しており、西側ともどもあまりしっかりした掘り込みとはいえない。東西長は法面上８ｍ、床面上 7.5 ｍで、南北は 3.5 ｍであるが、南北両端は道路建設地外であるため未発掘で、どのようになっているのかは不明である。したがって、現状からは本住居址の平面プランは隅丸方形か長方形を呈する住居址と考えられる。

住居址中央部床面には、Ｐ１～Ｐ３の柱穴があり、Ｂ３区の南端には東西法面幅 1.1 ｍ、床面幅 55 cm、南北法面上長 66 cm、同床面長 36 cmの炉址が半分発見されている。炉址は住居址床面よりの深さ 22 cmで、床面には灰白色の灰が堆積していた。Ｐ１は直径 27 cm、深さ 22 cm、Ｐ２は直径 23 cm、深さ 20 cm、Ｐ３は直径 28 cm、深さ 22 cmで、柱穴底には石等の詰めものは存在しなかった。Ｐ１～Ｐ３の柱穴の分布からすると、Ｐ３の北方にＰ４が想定されるが、距離的にはその想定場所は発掘地域外となっている。炉址は住居址中央部にあるのが普通であることから考えると、Ｐ２とＰ３の南方にも並行して柱穴の存在が想定される。

住居址西部のＡ１区とＢ１区に跨がる部分には、南北長 2.2 ｍ、東西幅 60 cm、深さ 13 cmの不規則な土坑があるが、これには遺物は全く伴っていない。Ｂ１区の住居址掘り込みに接して柱穴状の掘り込みが発見されているが、深さが 3 cmしかなく、現状では柱穴とするには躊躇せざるを得ない。西側中央部の掘り込み法面下に接する床面に、45 cm× 60 cmの長円形の赤褐色の焼土面があり、その焼土面上に幅 14 cm、長さ 20 cm、厚さ 10 cmの偏平な焼けた石が存在した。この焼け石の東には小さく割れた焼け石が数個分布していたが、大きな焼け石の破片



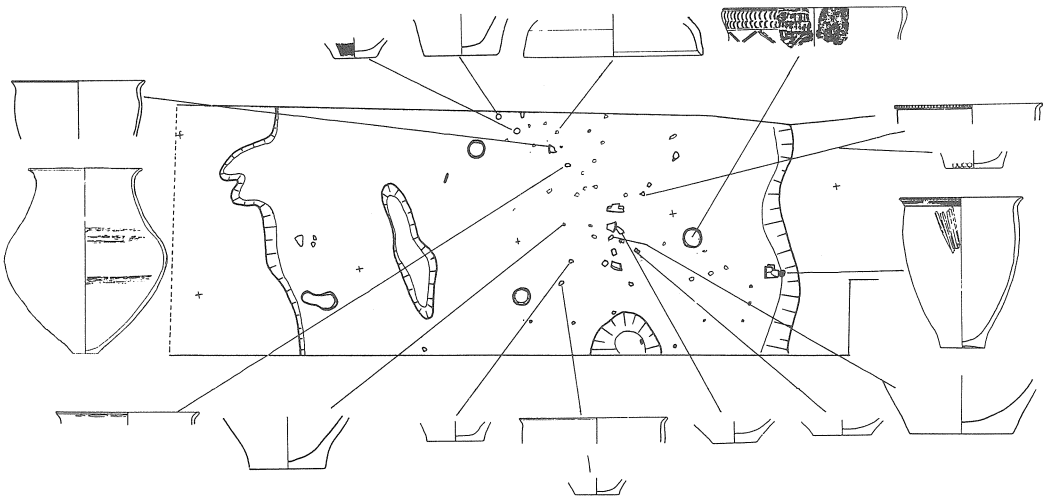
図－4　横田遺跡Ⅲ区出土の住居址平・断面図

とみて間違いない。この焼土面や焼け石は炉址ではないが、火を燃やした跡であることは明らかである。

以上のことから、住居址であることは明白となったが、その平面プランは柱穴や炉址のあり方から、長軸方向を南北にとる６本柱の長方形プランの大型住居址と把握すべきで、隣接する伊豫市片山遺跡Ｉ区のSB 03（註４）との関連性を追求する必要があろう。

（２）住居址内の遺物の出土状況(図－５・図－６)

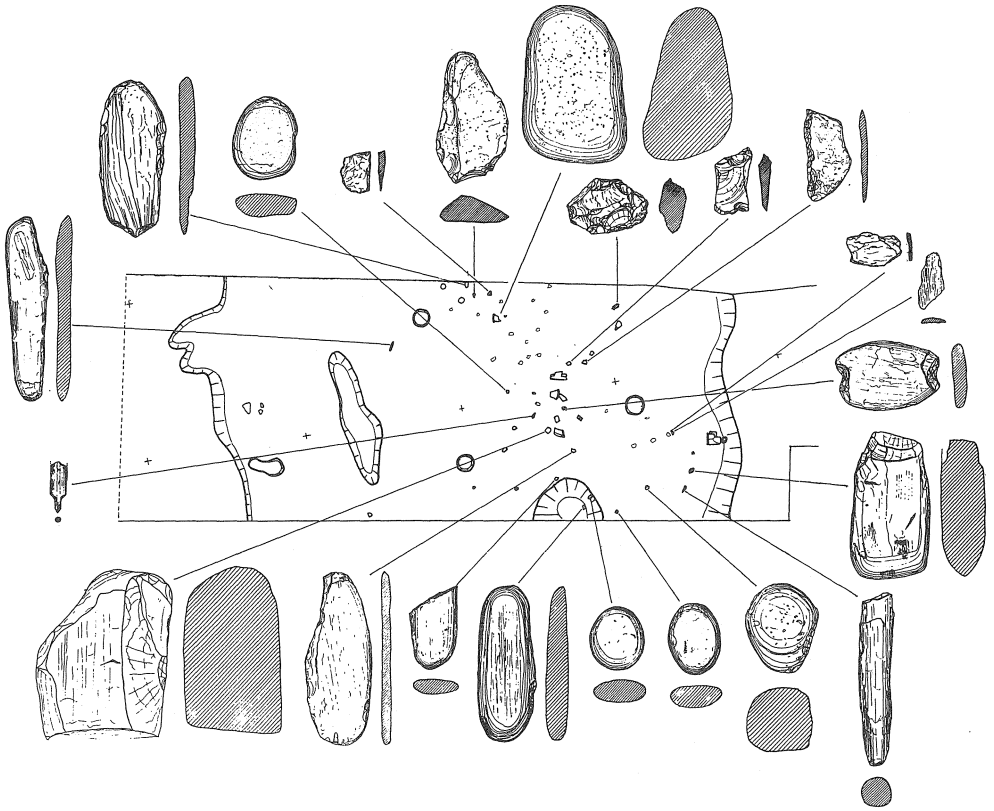
住居址内で最も遺物が集中して出土したのは、Ａ３区とＢ３区のＰ１～Ｐ３に囲まれた範囲内であり、炉址の北部に続く場所である。これに続くのがＰ３と炉址の東部と炉址上であり、Ｐ１とＰ２を結ぶ線より西部はほとんど遺物の出土が認められなかった。遺物の大半は床面上10 cm～16 cmの範囲に集中しており、一部は黒褐色粘土の上面、すなわち住居址上面からサヌカイト製のスクレーパーや弥生土器片、須恵器片が出土した。東端の掘り込み法面下の床面上からも１個体分の甕が出土している。



図－５　横田遺跡Ⅲ区住居址内の土器の出土位置

遺物が最も多く出土したＡ３とＢ３の境界線上は、甕の破片とともに石鏃状石器・石錘が出土している。炉址の床面からの遺物の出土はなかったが、炉跡上15 cm～30 cmの範囲からは叩き石、磨き石が出土した。住居址南東部では床面上10 cm～14 cmから磨製石斧・石棒・叩き石が出土した。なお、Ｐ２中から縄文前期の土器片が１点だけ単独で出土したが、他には認められない。住居址上面から出土したサヌカイト製スクレーパーは形状、剥離手法から縄文前期の遺物とみられ、縄文土器片と同時期とみてよい。恐らく、山麓寄りの地域に縄文前期の遺跡の存在が想定される。

大半の遺物が床面上10 cm～16 cmに集中しているので、これら遺物が直接住居址に関係するものでないとの疑問もあるが、すべての遺物が安定した状態で出土し、なかには土圧によっ



図－6　横田遺跡Ⅲ区住居址内の石器の出土位置

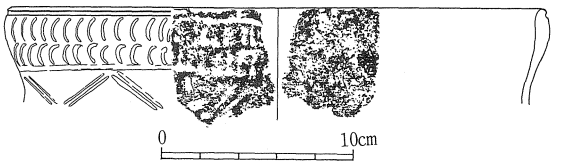
て押圧された状況を示すものもあり、加えて上面からの出土が少ないなど、住居址に伴った遺物とみてよい。

（3）住居址内出土の遺物

住居址内からの出土遺物は、すべて文化遺物であり、それも縄文土器、弥生土器と石器に大別される。

①縄文土器（図－7）

SB 01のＰ３の柱穴の埋土を発掘中に、縄文土器片が単独で一片だけ出土した。縄文土器片は深鉢の口縁部の破片であり、器形全体をうかがうことは不可能である。深鉢の推定口径は28 cmで、頸部が心もち絞られ、口縁部は直立ぎみに外反している。口縁端は丸みをもっており、口縁部外面の施文帯は若干肥厚している。外面の口縁下に一条の沈線文を配し、その下部にくずれたＣ形



図－7　横田遺跡Ⅲ区住居跡内出土の縄文土器実測図

爪形文を二段に連続して施している。更に爪形文の下部には、斜めに二重の沈線文が施されているので、重複する山形沈線文の可能性が大である。内面は指圧痕が残るが無文であり、色調は黒褐色で、胎土中には比較的大きな砂粒と微細な砂粒を多く含んでいる。土器片は外・内面とも磨滅が激しいので、他地域から流入したものとみられる。

ただ、本住居址並びにⅢ区の発掘地区から、これ以外の縄文土器片が発見されていないので、原位置を保ったものとはいえない。この深鉢の土器片は、口縁部にC形爪形文をもっていることから、縄文前期に属するもので、県内では越智郡大三島町大見遺跡出土の、大見Ⅱ式土器（註５）に比定される。したがって、前期も前半に位置づけが可能である。恐らく、伊豫市上三谷地区の大谷川上流域に、縄文前期の遺跡が存在する可能性が大である。

②弥生土器

弥生土器は視覚的には比較的多く出土したように見えたが、すべてが細片となっていたからで、底部の数から勘案するとほぼ12個体分であり、復元可能な土器はほとんどない。出土土器は甕がほとんどで、壷はわずか１個だけである。土器底部のなかには壷とみられるものが認められるが、断定はできない。甕は口縁部が８個体分出土しており、おおむねその特徴を把握することができる。

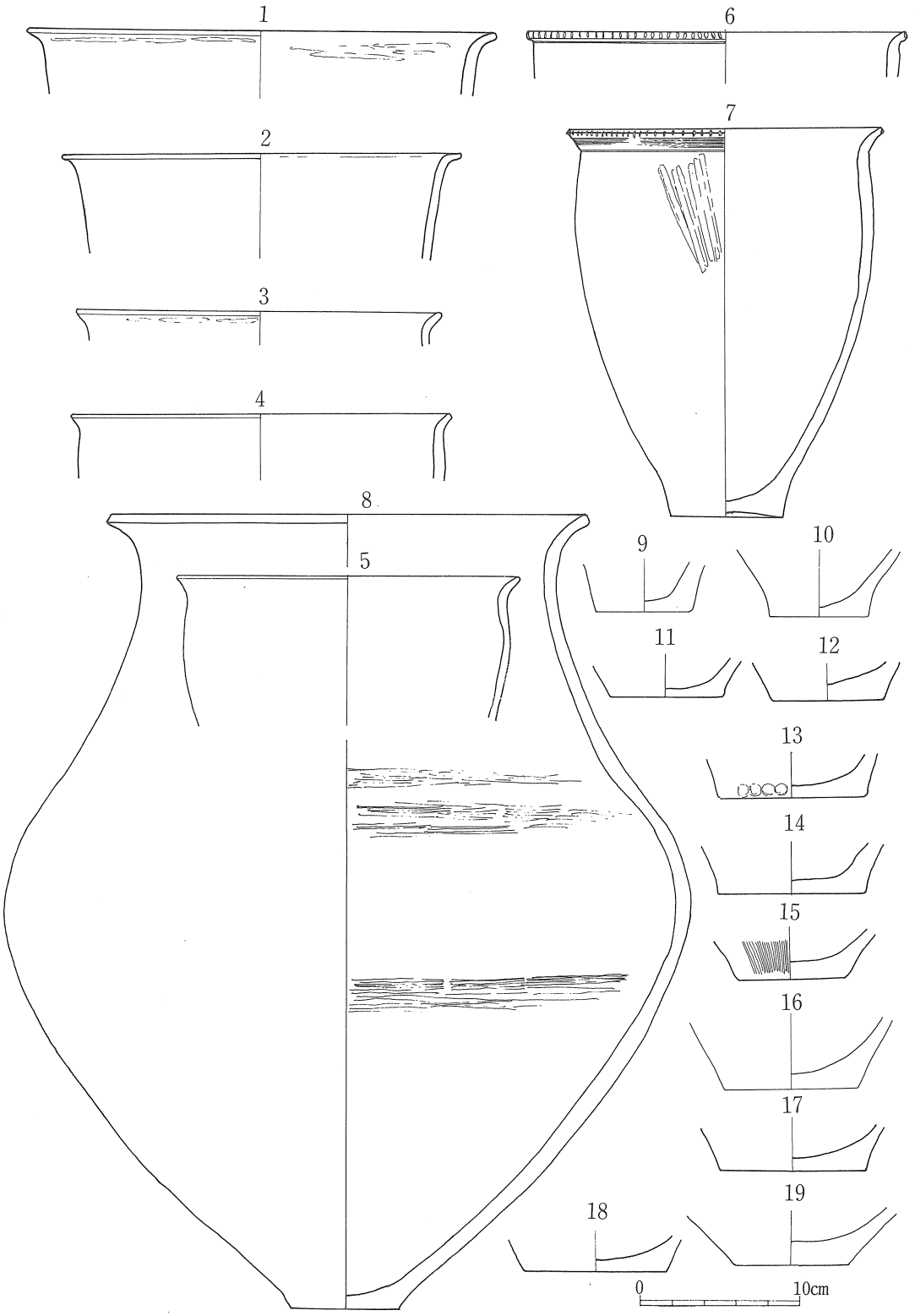
○甕形土器（図－８の１～７）

甕は口縁端に箆による刻み目をもつものと、もたないものに大別される。

１は口径28 cmで、口縁部が短くゆるやかに外反し、口縁端は丸みをもっている。胴部の膨らみはなく、最大胴径より口径が大である。外・内面とも剥落が激しく、口縁部の外・内面に一部横箆調整の跡が認められる。色調は明褐色で、胎土中には角のある石英粒を含んでおり、非常に脆い。２も１と器形は類似しているが、口径が23 cmと一回り小さく、口縁部は短く折り返された状態を呈している。口縁下から胴部にかけては膨らみはなく直線的であり、胴径よりも口径が大であり、外・内面は剥落が激しく調整は不明である。色調は明褐色を呈し、胎土中には角のある微細な石英粒と丸みのある頁岩粒を含んでいる。３は口径22 cmで、器厚は薄く、口縁部が短く斜めに外反し、胴部が心もち膨らみを有しているようである。口縁下外面に横箆調整痕が一部認められる。色調は外面は黒色研磨で、内面は茶褐色を呈し、胎土中には角のある石英粒や微細な頁岩粒を含み、非常に脆い。

４は口径23 cmで、口縁部は短くゆるやかに外反し、胴部は直線的で、最大胴径と口径がほとんど同じとなっている。色調は茶褐色で、一部が紅茶褐色を呈し、胎土中には角のある石英粒と頁岩粒を多く含んでいる。５は口径20.5 cmで、口縁部がゆるく曲線的に外反し、上肩部が心もち膨らむものの、底部に向かってスマートに絞られている。外・内面とも剥落が激しく、調整痕は不明である。色調は黒褐色で、胎土中には微細な石英粒や頁岩粒を多く含み脆弱である。３～５は同じ器形の甕とみることができる。

６は口径23 cmで、口縁部は特に短く、小さくゆるやかに外反し、口縁端面に上部から箆刻み目を連続してもつが、口縁下には沈線をもたない。胴部の膨らみも認められず、最大胴径よりも口径が大である。色調は外面が黒色箆研磨で光沢を有し、内面は明褐色で、胎土中には角のある微細な石英粒と丸みのある頁岩粒を含んでいる。６の下部から13の底部が出土し



図－８　横田遺跡Ⅲ区住居址出土の弥生土器実測図

ているので、６の甕の底部の可能性が大である。７はほぼ器形をうかがえる甕であり、口径19 cm、器高23.5 cm、最大胴径18 cm、底径6.8 cm である。口縁部は短くゆるやかに外反し、上胴部が心もち膨らみ、底部へと絞られている。口縁端面には箆による細い刻み目を連続して施し、口縁部と体部の境には半截竹管による浅い押し引き文がめぐらされている。上胴部は一部箆研磨痕が残っている。底部はわずかなあげ底となっている。色調は暗褐色を呈し、胎土中には微細な石英粒だけを含んでおり、胎土からすると他の土器とは識別可能である。

以上が本住居址から出土した甕である。甕は器形や施文手法からみて、１・２のＡ群と、３～５のＢ群、それに６～７の口縁部に刻み目をもつＣ群に分類される。松山平野では甕の口縁部が短く、わずかに外反し、口縁端に刻み目をもつＣ群には、Ａ群とＢ群が多く伴う。どちらかというとＡ・Ｂ群が主体を占め、一部Ｃ群が混在しているとするのが適切である。本遺跡ではこの段階での口縁下の箆描き沈線文は出現していない。７の口縁下の半截竹管にによる暗文風の細い線が、箆描き沈線文出現を暗示しているようである。これらの甕は松山平野では最も古い時期のものの一つである。

○壷形土器（図－８の８）

壷とみられるものが１点だけ出土している。

壷は広口大型壷で、口径29 cm、推定最大胴径41 cm、推定器高47 cm、底径は7 cm である。口頸部は短くゆるやかに外反し、頸部から上胴部が長く、最大胴径は上部にあり、最大胴径部から底部にかけては膨らみを有しながら絞られている。底部は平底で、1.2 cm の厚さであった。頸部がわずかに肥厚するだけで、段や沈線文などの文様は認められない完全な無文土器である。色調は明褐色で、一部黒色や茶褐色の部分があり、胎土中には微細な角のある砂粒の混和が認められ、なかには丸みをおびた砂粒もあった。土器の外・内面とも剥落が激しく、特に内面の調整は不明であるが、一部焦げが付着している。外面は全面箆研磨で調整している。

○土器底部（図－８の９～19）

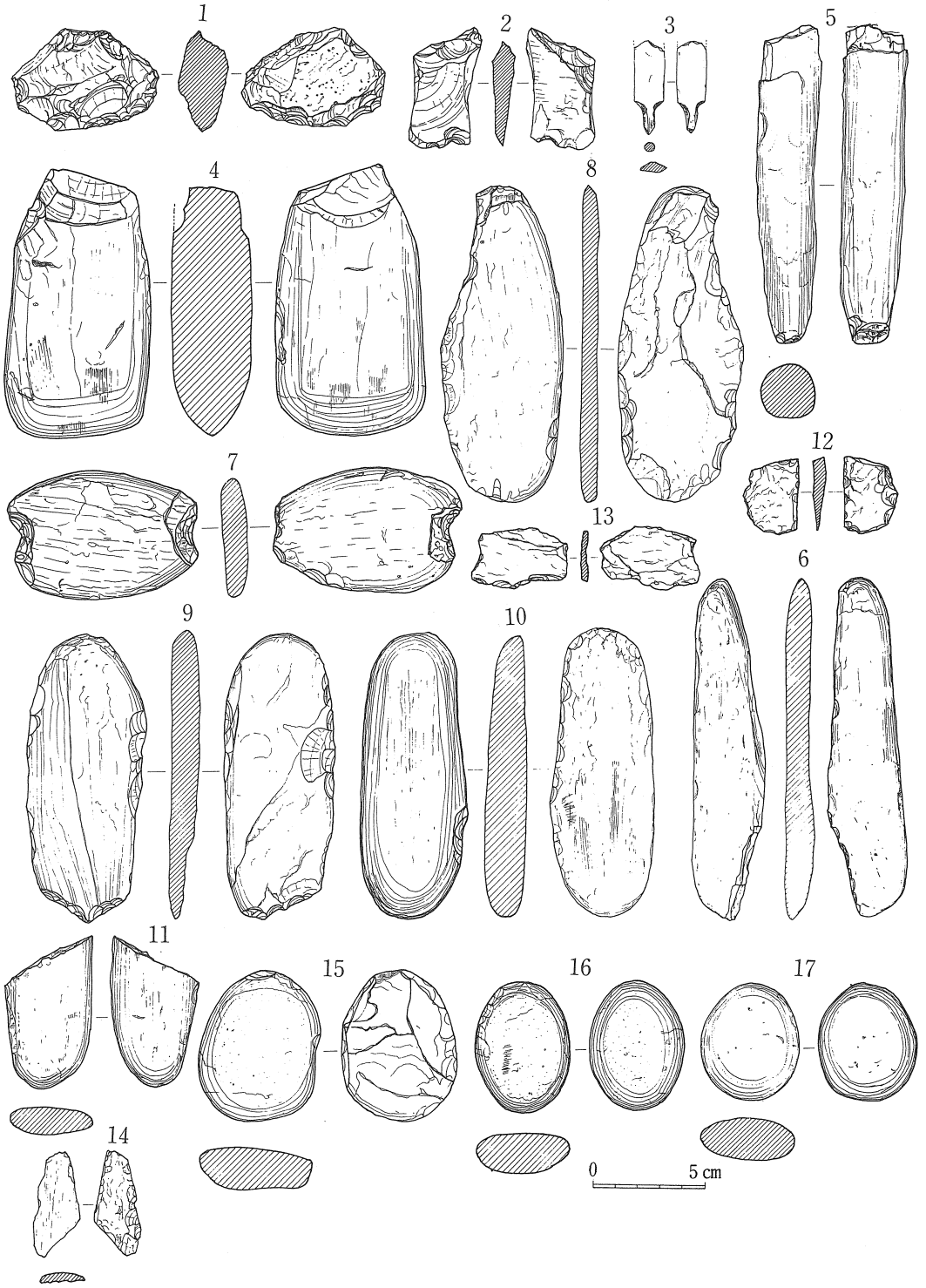
土器底部は10個体分出土しているが、そのほとんどが甕の底部とみられるものである。

９は底径5.7 cm、10は6 cm、11は7 cm、12は6.7 cm、13は9 cm、14は9 cm、15は6.5 cm、16は8 cm、17と18は8.7 cm である。このうち13の底部は、６の口縁端に刻み目をもつ甕の底部である。13を除く底部で明らかに壷の底部と断定できるものはないが、可能性としては底部の張り出しの状態から14・15あたりが壷の底部の可能性があるだけである。これら底部の色調は暗褐色ないし黒褐色か明褐色で、外面の調整痕の残るものは15の櫛描き文だけで、他は剥落が大で調整は不明である。ただ、12だけは胎土中に金雲母を比較的多く含んでおり、胎土も和泉砂岩の風化土とは明らかに相違し、他地域から搬入された土器のようである。

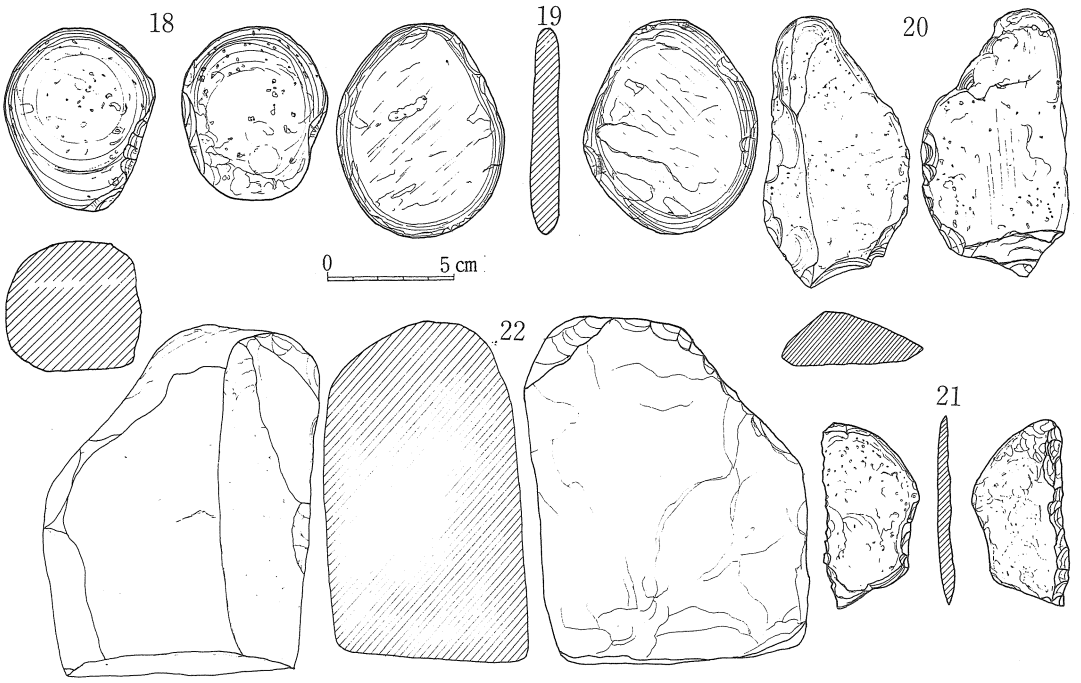
以上の土器は、すべて北九州の遠賀川系土器であることはすでに触れた通りであり、松山平野のみならず、愛媛県内で弥生土器として最初に編年的位置づけがおこなわれる第Ｉ様式第１型式の土器群であることは間違いない。恐らく、有段の甕・壷、重弧文や一部沈線文の上下を削り出して凸帯状とする土器群も含むものとみられ、極めて複雑な様相を示している。

③石器（図－９の１～17、図－10の18～22、図－11）

石器ないし石器と推定可能なものが合計22点出土している。石器の種類としてはスクレー



図－9　横田遺跡Ⅲ区住居址出土の石器実測図（1）



図－10　横田遺跡Ⅲ区住居址出土の石器実測図（2）

パー状石器・石核・磨製石鏃・磨製石斧・石鍬状石器・石棒・石錘・石庖丁状石器・叩き石・磨石・円板状石器などがあり、多種多様である。

1は長さ6.3 cm 、幅4.5 cm 、厚さ2.1 cm、重さ53 g の肉厚のスクレーパー状石器である。裏面は大半が自然面を残しており、石質はサヌカイトである。住居址上面からの出土であるため、直接住居址に伴ったものとはいえず、かつ、他の石器とは異なり、縄文前期の土器に伴ったものかもしれない。2は長さ5 cm、幅3 cm、厚さ0.9 cm 、重さ13 g のサヌカイトの石核とみられるものである。下部は薄く上部が厚く、断面は楔形を呈している。

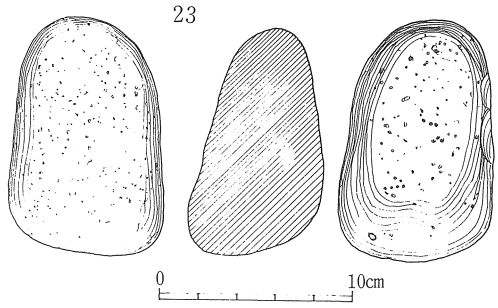
3は残存全長4.1 cm 、幅1.2 cm 、中央部の厚さ0.4 cm 、茎の長さ1.2 cm 、直径0.4 cm 、重さ2 g の柳葉形磨製石鏃である。刃部の断面は菱形を呈し、全面研磨によって光沢を有している。先端部が欠落しているので、磨製石槍の可能性を否定するものではないが、ここでは緑泥片岩の柳葉形磨製石鏃としておきたい。緑泥片岩を利用した磨製石鏃は、銅鏃使用を暗示しているといえるし、実用的石鏃でなく、仮器ないし儀器と理解すべきかもしれない。

4は頭部が欠落する残存全長11.6 cm、刃部幅6 cm、厚さ3.5 cm 、重さ404 gの短冊形磨製石斧である。刃部は蛤刃に近く、頭部がわずかに狭くなっている。石質は硬質砂岩に一部頁岩が嵌入している。頭部は使用によって破損している。5は両端が欠落している石棒で、残存全長13.7 cm、中央部径2.4 cm 、重さ127 gで、先端部が細くなっている。石質は緑泥片岩で、全面粗雑ではあるが研磨している。両端の欠落は使用のためとみられるので、土掘り用の石鍬に似た用途をもった石器としておきたい。

6は長さ14.7 cm、中央部幅3.1 cm 、厚さ1.2 cm 、重さ90 g の偏平な緑泥片岩の海石であり、

下部の一側端に剥離が認められる。剥離痕のある部分以外は自然の磨滅痕が残っている。上部の細い部分を握り、剥離部分でものを叩いたのではなかろうか。7は長さ8.2 cm 、幅5.1 cm、厚さ1.1 cm 、重さ86 g の石錘で、両端に抉入をもっている。石質は緑泥片岩で偏平な海石を使用している。

8は長さ13.7 cm、幅5.4 cm 、厚さ0.7 cm 、重さ234 gの靴形をした石鏃状石器である。緑泥片岩の長円形の海石を半截し、片側の上部を大きく剥離している。そのため片面は自然の磨滅痕が残り、他の片面は剥離した面がそのまま残存している。9も長さ12.4 cm、幅4.7 cm 、厚さ1.2 cm 、重さ127 gの石鏃状石器である。先端部は厚さ0.7 cm と薄くなり、両面から剥離調整されている。恐らく、薄く剥離調整された部分を鏃先として使用していたのであろう。石質は緑泥片岩の海石である。10は長さ12.4 cm、幅4.5 cm 、厚さ1.8 cm 、重さ155 gの長円形偏平な海石であり、加工痕や使用痕は認められない。石器とするにはやや問題があるが、この地に存在しない緑泥片岩の海石であることから、何らかの目的をもって住居址内に持ち込まれたものであろう。11も10と同じようなものであろう。残存全長は6.5 cm 、幅3.8 cm 、厚さ1.2 cm 、重さ47 g の偏平な緑泥片岩の海石で、三分の一が破損している。



図－11　横田遺跡Ⅲ区住居址出土の石器実測図（3）

12は石庖丁状石器の破損品とみられるもので、その極く一部である。残存全長は2.3 cm 、幅3.2 cm 、鎬の厚さ0.5 cm 、重さ4 g で、刃部は薄くなっている。側端と刃部は剥離調整されている。石質はサヌキトイドである。13は長さ4.1 cm 、幅2.3 cm 、厚さ0.3 cm 、重さ4 g の緑泥片岩の剥片であり、石器製作の際の剥片かもしれないが、他に同様な剥片が出土しないことから、何かに加工するための素材かもしれない。14も同じような緑泥片岩の剥片である。残存長は4.4 cm 、基部幅2 cm、厚さ0.4 cm 、重さ5 g の緑泥片岩の剥片であるが、片面はゆるやかな曲面となり、研磨されている。他の片面は剥離面がそのまま残存している。恐らく、磨製石器の一部が剥離したものか、磨製石鏃の未成品ないし製作途中の破損品かもしれない。

15は長径6.5 cm 、短径5 cm、厚さ1.8 cm 、重さ70 g の火で焼けた砂岩の叩き石である。表面は軽く研磨されているが、裏面は使用の際に剥落したのか粗い割れ目が縦横に走っている。16は一回り小さい砂岩製の叩き石ないし磨石であり、長径5.6 cm 、短径4 cm、厚さ1.7 cm 、重さ52 g の卵形をし、全面研磨されている。17も長径5 cm、短径4.3 cm 、厚さ1.8 cm 、重さ44g の円形の砂岩製叩き石で、全面研磨されている。

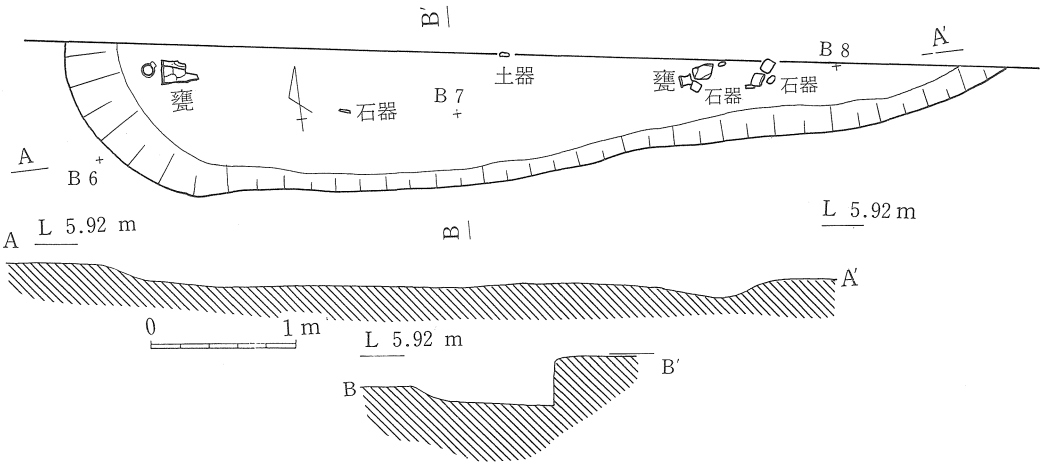
18は炉址の東80 cmから出土した長径6.8 cm 、短径5.7 cm 、厚さ5 cm、重さ90 g の球形に近い川石の自然礫であり、叩き石か磨石に類するものであろう。19は長径8.2 cm 、短径6.4 cm 、厚さ1.1 cm 、重さ70g のほぼ円形偏平な緑泥片岩の海石である。加工痕は認められないが、磨石的なものに使用された可能性が強い。20は長さ10.4 cm、幅5.6 cm 、厚さ2.1 cm 、重さ13

gで、断面は偏平な山形を呈し、両面とも自然の礫面が残存しているが、基部に大きな剥離痕をもつ比較的大きな礫で、石質は安山岩である。21も安山岩の川石の大きな剥片である。石核から大きく剥離した剥片の片側の縁端部に、小さな調整痕を残している。一面は自然礫面が残存しているが、他の面は剥離面がそのままである。恐らく、20は21のような石器を作るための石核と理解すべきかもしれない。22は工作用の台石とみられるもので、長さ13.6 cm、幅10.3 cm、厚さ7.5 cm 、重さ1.8 kg で長方形の一角が斜めになっている。住居址内出土では最も大きな石である。両面とも水平であるが、やや狭い面を上にして使用していたとみてよかろう。石質は砂岩である。23は砂岩製の叩き石である。

3．1号溝状遺構と出土遺物

（1）1号溝状遺構（SD 01）（図－12）

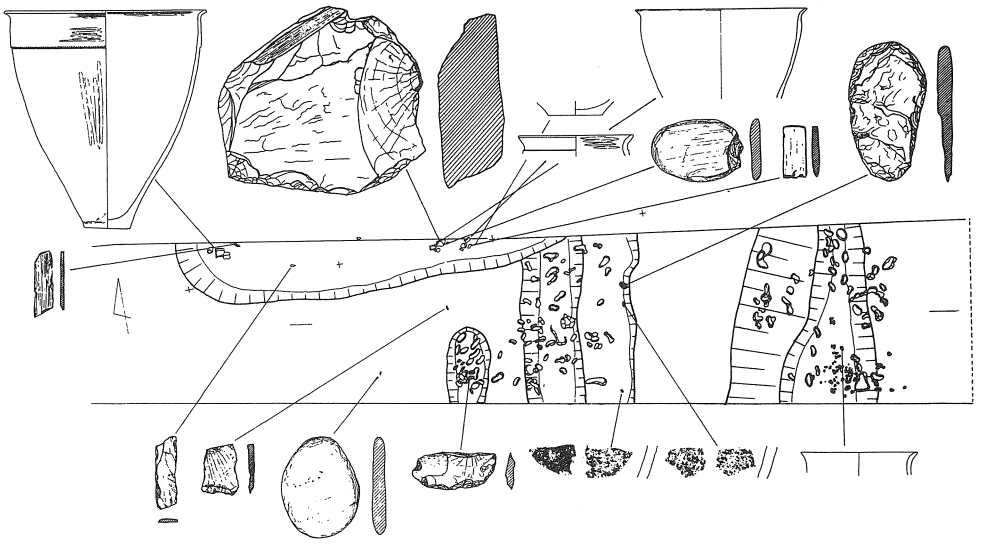
住居跡（SB 01）と2号溝状遺構（SD 02）の間のＡ６区～Ａ７区、Ｂ６区～Ｂ８区にかけて所在した溝状遺構である。1号溝状遺構の北部は道路建設予定地外であるため調査不可能であり、全体の形態がどのようになっているのかを明らかにすることはできなかった。検出した部分は溝の約三分の一と推定される。溝の西端のカーブから推定すと半円形の掘り込みとなり、掘り込み法面はゆるやかで、西端では法面幅は40 cm、南部側は13 cm～ 15 cmである。溝底部は完全な水平ではなく、中央部が心もち深くなっている。溝内は黒灰色粘土が堆積し、溝の深さは平均15 cmで、床面は3層の黄褐色粘土層である。発掘によって検出した東西全長は6.5 mで、東端では2号溝状遺構を掘り込んでいるので、少なくとも2号溝状遺構が先行していたことは明らかである。Ａ７～Ｂ７線上での溝の幅は1 mであるが、西端の状況から推定する溝幅は2 mを若干超えるくらいであろう。隅丸方形住居址の可能性を完全に否定するものではない。



図－12　1号溝状遺構平・断面図

（2）1号溝状遺構内の遺物の出土状況（図－13）

深さ10 cmの溝状遺構の上面からは遺物は発見されず、溝内に流入堆積していた黒灰色粘土



図－13　横田遺跡Ⅲ区１号溝状遺構の遺物の出土位置

を除去してはじめて遺物の存在が明らかとなった。１号溝状遺構の発掘部分で遺物が遺存していたのは、西端の半円形の掘り込み法面下の床面上からであり、口縁部を西にした状態の甕が１個体分出土した。底部は口縁部より西にあったので、口縁部を床面上に伏せた状態で置かれていたものが倒れたのであろう。甕に東接して緑泥片岩の剥片が１点出土した。中央部からの遺物の出土は少なく、緑泥片岩の剥片と土器片が各１点出土しただけである。遺物が集中するのはＡ７区とＢ７区の境界線上からで、土器片が数点まとまって出土し、石錘・磨製ミニチュア石斧なども一緒に出土した。しかし、これらは床面上７～８cmから遊離した状態での出土である。ただ、ミニチュア石斧だけは大きな石の下からの出土であった。１号溝状遺構内出土の土器は、住居址出土の土器と同じ型式の土器であることから、住居址と密接な関係を有する溝であったことは疑いない。

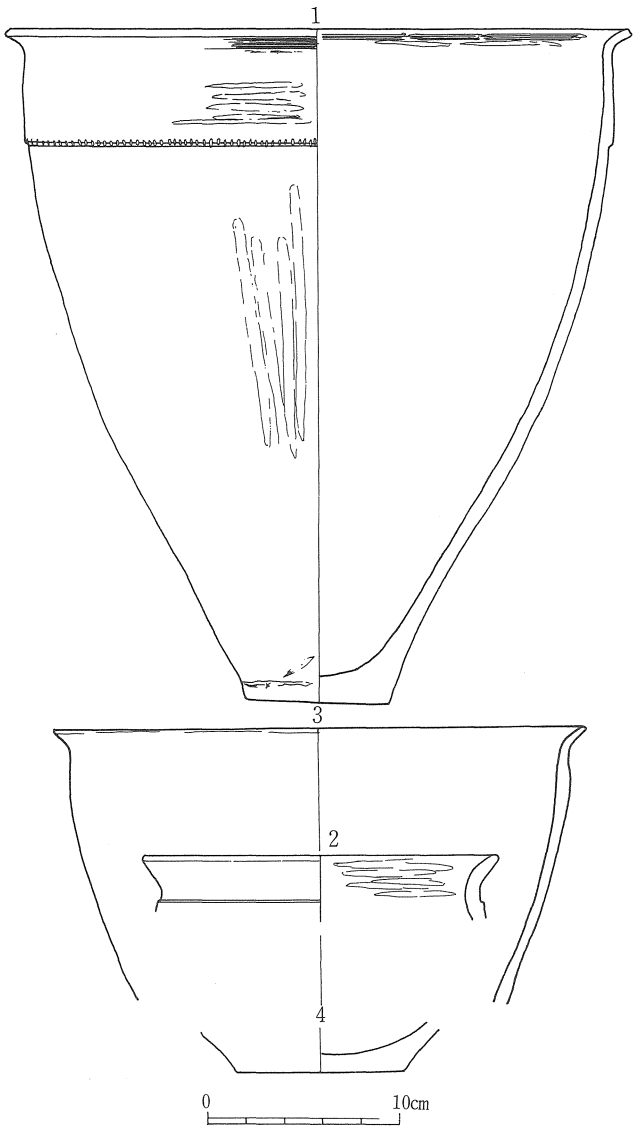
（３）１号溝状遺構出土の遺物

１号溝状遺構から出土した遺物は、すべて文化遺物であり、弥生土器と石器に大別される。

①弥生土器(図－14の１～４)

甕の完形品が１点と甕の口縁部が２点、それに深鉢ないしは甕の底部が１点出土している。３点出土し甕のうち、器形全体をうかがえるのは１の甕だけで、他は口縁部から胴部にかけての破片である。

１は甕の完形品で口径32.5 cm、器高35.6 cm、底径7.6 cm で、最大胴径が口縁下にあり、底部に向かって直線的に絞られ、膨らみはほとんど認められない。口縁部は短くゆるやかに外反し、口頸部と体部の境には下向きの段をもち、その上に篦状工具で連続する刻み目を施し、口縁端は水平となっている。２も甕の口縁部で、口径18.8 cm、頸部径16.8 cmとやや小形品である。口縁部の外反からみると口径と胴径がほぼ同じになると想定され、頸部と体部の境に段をもっているが、その段は上向きで、１の段とは逆となり、段上に刻み目はない。口縁端は丸くおさめており１とは相違する。３はゆるやかに外反する口縁部で、上胴部が心もち肥



図－14　横田遺跡Ⅲ区１号溝状遺構内出土の弥生土器実測図

厚し、最大胴径より口径が大である。肩部から底部に向かって絞られた状態で、胴部の膨らみはほとんど認められない。文様はなく、外面は横篦研磨で調整している。

４は完形の甕の東部から出土した底径９cm、厚さ0.9cmの甕の底部である。底径から考えると３の甕の底部とみてほぼ間違いなかろう。これら土器はその出土状態から一括遺物と把握できるもので、同時期に使用されていたものである。一括遺物でありながら甕は３点ともそれぞれ違っているが、１・２は基本的には口縁部と体部を段で区画するもので、これらの一群と、無文の３の土器群が共存していたものであろう。本遺構においては、有段の甕と無文の甕の前後関係はなく、並行して存在したものであろう。県内では第Ⅰ様式第１型式に属する弥生前期初頭の土器であり、遠賀川式土器の流れを強く汲むものである。これらと同じ土器は、松山市から一部出土しているが、甕の口縁部の篦刻み目など若干の違いが認められる。

有段のある土器は、横田遺跡Ⅰ区の試掘や追試掘、それに南接する伊豫市片山Ⅰ区、更に松山市西野Ⅲ、土壇原Ⅴの各遺跡からも出土している。恐らく、これら有段をもつ土器は、伊豫市や松前町の海岸から松山平野の南山麓伝いに平野内部へと波及したものであろう。伊予灘に近い片山Ⅰ区や横田遺跡Ⅰ区では、縄文晩期の深鉢や重弧文土器を伴っており、内陸部の西野Ⅲでは削り出し凸帯を、土壇原Ⅴでは木葉文土器を伴っていることから、有段の土器は弥生前期初頭から中葉まで残っている。特に甕の上胴部に段をもち、その上に米粒状の刻み目をめぐらすものは、前期初頭に属するものではなかろうか。

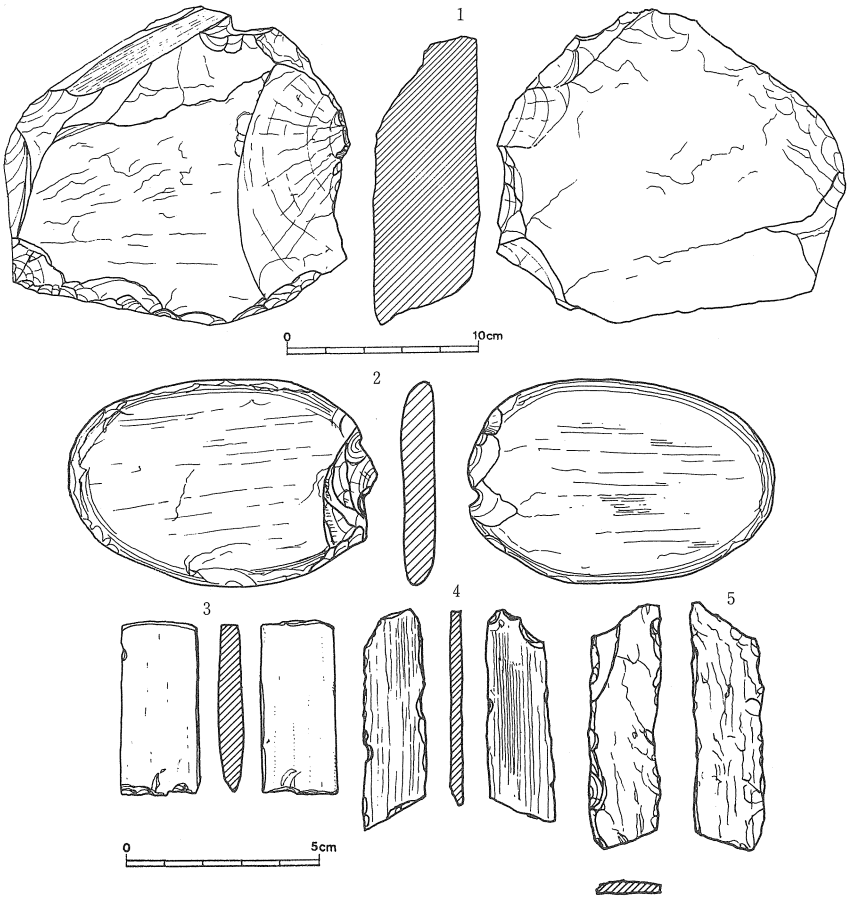
②石器（図－15の1～5）

すべての石器は遺構表面上からの出土ではなく、埋土中ないし床面上からの出土である。

1は長さ17cm、幅15.5cm、厚さ5.1cm、重さ1.8kgの大型石器で、一端を大きく剥ぎ取り、他の3面を小さく剥離し、その1面の下端も剥離調整している。石質は硬質砂岩で、一見、大型礫器状石器である。石核かとも思われるが、同質の石器、剥片等が出土していないことから、ここでは大型礫器としておきたい。

2は1の大型礫器に東接して出土した石錘である。石錘は長さ7.5cm、幅5cm、厚さ0.8cm、重さ64gで、偏平な長円形を呈する緑泥片岩の海石で、長軸の一端に抉入が認められる。石錘と理解したが、石錘の未成品の可能性が大である。同じような石錘が横田遺跡Ⅱ区3号河川址や、伊豫市八反地池遺跡からも発見されている。

3は床面上から出土したもので、長さ4.3cm、幅1.9cm、厚さ0.6cmの磨製ミニチュア石斧であり、頭部は水平で刃部は両端から研磨し尖っている。使用による破損の跡が認められる。石質は堅緻な緑色片岩である。使用痕が認められるが、祭祀的なミニチュア石斧ではなかろうか。磨製ミニチュア石斧は、松山平野の弥生中期や後期の遺跡から散発的には発見されているが、今回のように前期の遺構に伴って発見された例はあまりない。本遺跡周辺では、時期的な違いはあるが隣接する片山遺跡Ⅰ区の弥生後期の住居址内から、同じ形態の小型磨製石斧が出土している（註6）。この磨製ミニチュア石斧は、松山平野南部で多く発見されている有柄式磨製石剣と同じ性格をもつものかもしれない。



図－15　横田遺跡Ⅲ区1号溝状遺構内出土の石器実測図

4は長さ5.5cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ5gの短冊型の緑泥片岩で、縦剥ぎ剥片の両面を粗雑ではあるが研磨している。両端とも欠損しているので、磨製ミニチュア石斧ないし石鏃の未成品の可能性も認められる。

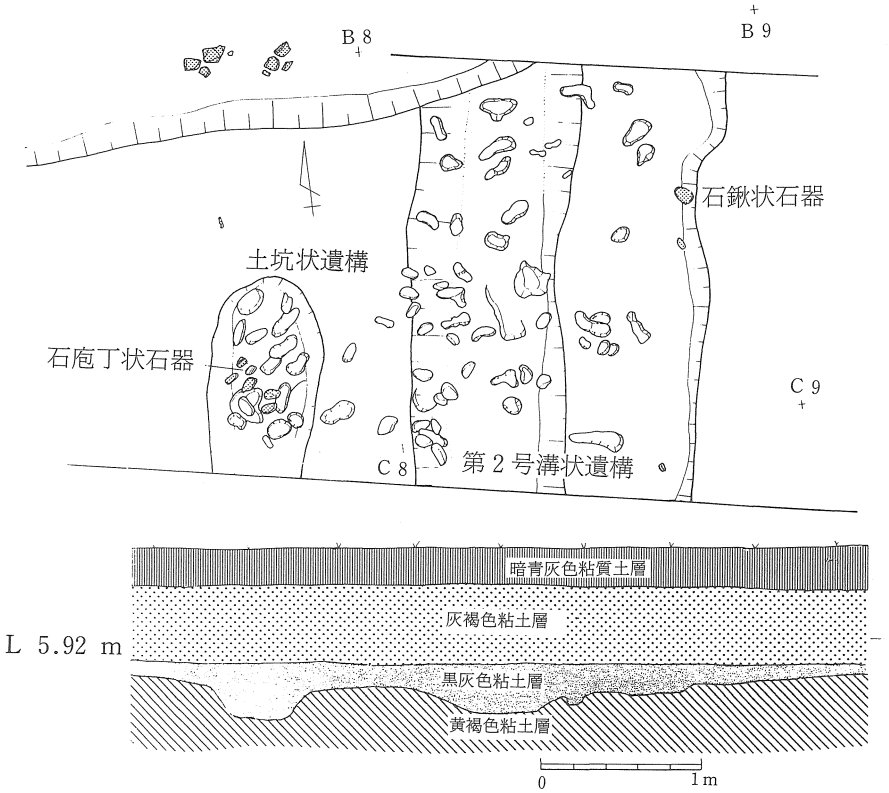
5は緑泥片岩を剥ぎ取った剥片であり、両面とも剥離痕がそのまま残存しており、先端部も欠損している。石槍ないしミニチュア石斧の未成品であるのかもしれない。いずれにしても、2～5の石器は、実用的石器ではなく、仮器または儀器的性格の極めて強い石器群であるので、遺構そのものも祭祀的性格を有するものかもしれない。

4．2号溝状遺構と出土遺物

（1）2号溝状遺構（SD 02）（図－16）

1号溝状遺構の東部の一部を切る、南北に走る溝状遺構である。東方4mには3号溝状遺構（SD 03）が、南部の西側には土坑状遺構が検出されている。溝状遺構の北端の1号溝状遺構との切り合い関係からすると、2号溝状遺構の構築が時期的に先行するようである。

2号溝状遺構は2段になっており、南北長2.7m、法面上幅は1.9mで、中央部が掘削さ



図－16　土坑状遺構と2号溝状遺構と地層断面図

れ、わずかに深くなっている。西部のやや深い部分は、法面上幅92cm、床面幅60cm、深さ29cmで、床面はゆるやかにカーブしている。東部の浅い溝部分の深さは18cmである。溝状遺構中には黒灰色粘土が全面にわたって堆積しており、床面は第3層の黄褐色粘土層である。深さ29cmの溝中の床面では大小37個の、一段低い部分で11個の足跡をそれぞれ検

出している。これら足跡は第３層の黄褐色粘土中に残された足跡の空間部に、黒灰色粘土が充填していたものを除去した結果、明らかとなったものである。足跡は形が歪になっていて、そのほとんどの上面が小さく、下部ほど大きくなり、形もくずれている。足跡の並びに規則性が認められないことから、直線的に歩いた跡ではなく、田植えとか稲作に直接関係するものではない。ただ、発掘中のＢ５区やＢ６区の柔らかい平坦面につけられた、発掘調査に従事するわれわれの足跡は、粘土の自重によって上面が小さく歪になった。その状態と検出した足跡の形態がまったく同じであった。そのため、これらの遺構が人の足跡であると認識したわけであり、ほぼ間違いないと主張できる。

（２）２号溝状遺構の遺物の出土状況（図－13）

深い部分の溝状遺構中からは、足跡群以外の発見はなかったが、一段浅い部分の法面上から、緑泥片岩の石鏃状石器が１点と、弥生土器片が２点床面に貼地の状態で出土した。これらのことから、２号溝状遺構は弥生前期のものとみてよく、かつ、残されていた足跡群もほぼ同時期とみられる。

（３）２号溝状遺構の出土遺物

出土遺物は弥生土器片と石器が１点だけである。

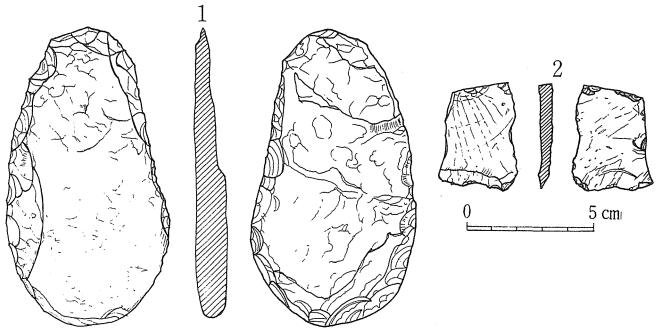
①弥生土器（図－13）

溝状遺構のゆるやかに傾斜する東法面上から、弥生土器の細片が２点出土したが、ともに胴部の破片であり、これといった特徴をもっていないので、その所属時期を明らかにすることはできない。ただ、１点だけは表面が黒色で、篦研磨されているので、弥生前期前半に属する土器とみておきたい。

②石器（図－17の１～２）

２号溝状遺構の法面上から出土したのは、長さ11.5 cm、幅6.3 cm、厚さ1.2 cm、重さ148 gの１の緑泥片岩の石鏃状石器１点である。器形はほぼ靴底形を呈し、海石の両側端と幅広い下部は、両端を握り易いように若干剥離しているが、断面は丸みを有している。刃部は幅が狭く、かつ薄くなっている。石質は緑泥片岩である。

土坑状遺構の北部から発見された２は、長さ４cm、幅2.9 cm、厚さ0.4 cm、重さ６gの安山岩の剥片は、ミニチュア石斧用の素材かもしれない。



図－17　横田遺跡Ⅲ区２号溝状遺構並びにその周辺出土の石器実測図（１は２号溝状遺構出土）

5．土坑状遺構と出土遺物

（1）土坑状遺構（SK 01）（図－16）

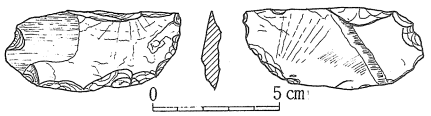
土坑は住居址と2号溝状遺構の間にあり、1号溝状遺構の南に位置している。東接する2号溝状遺構との距離は55 cmである。ここでは長円形に近い土坑としたが、南部の状態が不明であり、1号溝状遺構の西端の掘り込みの状態からすると、溝状遺構となる可能性を残している。検出している部分の南北長は法面上126 cm、床面上119 cmで、東西幅は法面上70 cm、床面上45 cmで、南端では法面上55 cm、床面上30 cmである。深さは20 cmであるが、床面には16個の人の足跡が残存しており、ほぼ中央部床面上には握拳大の川石が5個集中して遺存していた。石群中から緑泥片岩の石庖丁状石器が1点だけ出土した以外、他の遺物の出土は認められなかった。なお、土坑と2号溝状遺構の間には4個の足跡が遺存していた。

（2）土坑状遺構内の遺物の出土状況

土坑状遺構の床面上には、握拳大の緑泥片岩の川石が5個まとまって遺存していた。この5個の川石のほぼ中央部の床面上から、小型の石庖丁状石器が1点だけ出土したが、これ以外の遺物の出土は認められなかった。

（3）土坑状遺構内の出土遺物（図－18）

前述したとおり、土坑状遺構内からは長さ6.5 cm、幅3.2 cm、厚さ0.6 cm、重さ22 gの石庖丁状石器が1点出土しただけである。石庖丁状石器は緑泥片岩の比較的大きな石を剥ぎ取った一面の片側を剥離して刃部とし、そのほぼ三分の一が研磨されている。他の一面は剥離面がそのまま残存している。形態、刃部の状態等から半打半磨の小型石庖丁とみなすべきであろう。石庖丁はすでに縄文晩期の松山市船ケ谷や大淵遺跡からも発見されており（註7）、これらの流れの中にある石庖丁とみてよく、松山平野南部の弥生前期の遺跡から今後類似の石庖丁が発見されるとみてよかろう。



図－18 横田遺跡Ⅲ区　土坑状遺構出土の石庖丁状石器実測図

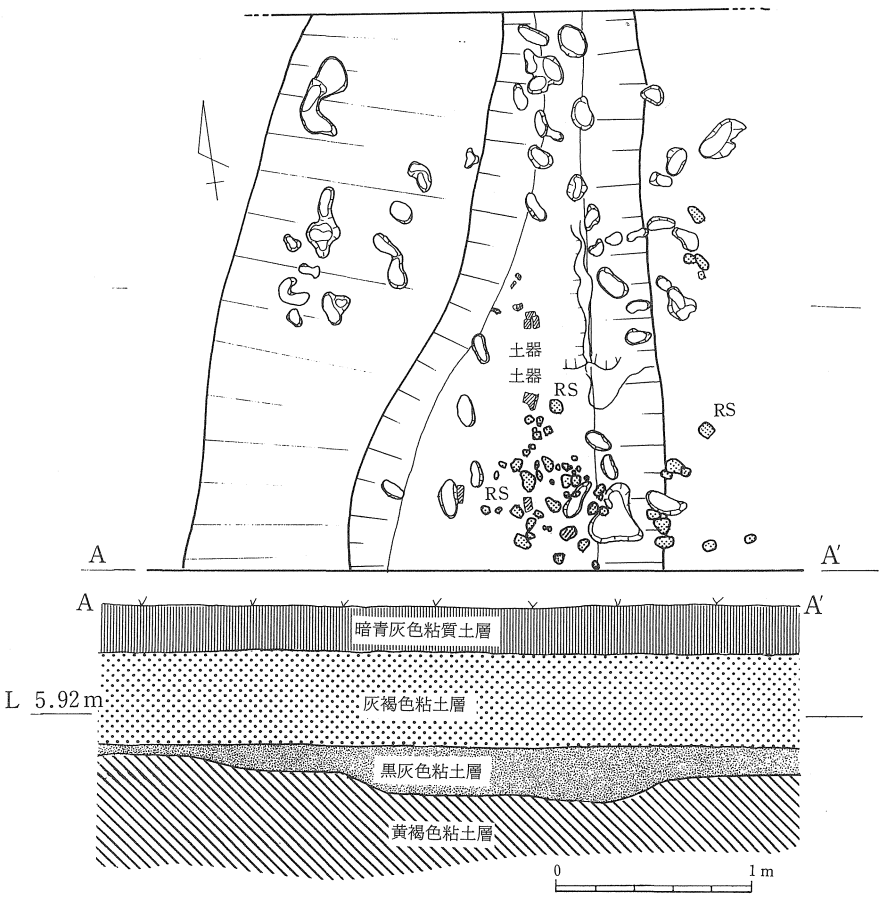
6．3号溝状遺構と出土遺物

（1）3号溝状遺構（SD 03）（図－19）

Ⅲ区東端に所在する溝状遺構であり、西方4 mには2号溝状遺構がある。3号溝状遺構は2号溝状遺構に平行し南北に走行しているが、幅は北端が狭く、南端が広くなっている。南北全長は3.88 m、北端法面上幅1.65 m、南端法面上幅2.45 mとなっているが、東半分は北端法面上幅70 cm、床面幅25 cm、南端法面上幅1.6 m、床面幅1.05 mと、南端が大きく膨らんでいる。西側の法面幅は1.1 mでゆるやかに傾斜していて、深さは12～14 cmで、その法面上中央部に15個の人の足跡が残っていた。深さが25 cm～28 cmと深くなった溝中並びに法面上には、29個の不規則な人の足跡が残っていた。全体的には爪先が北を指向している。足跡は溝の東側の微高地上にも8個残存していた。

3号溝状遺構の南部床面は、幅1 mと大きく拡幅されているが、その床面上に握拳大から

直径4cm～6cmの円礫が50個ほど集中していた。その一部は法面上や溝外にもかかっていた。これら円礫はすべて川石であり、石質は和泉砂岩か頁岩である。したがって、大谷川周辺の川石とみられ、あまり遠くから運ばれたものではない。集石の状態は不規則であるが、一種の集石であることは間違いない。Ⅰ区やⅡ区の河川址の床面に敷詰められた礫とは明らかに識別されるものである。このほか、溝中央部の東岸にも川石が4個遺存していた。



図－19　3号溝状遺構と地層断面図

2号と3号溝状遺構内に残された足跡は、共通性を有しているものの、この二つの溝状遺構に挟まれた幅1.5m～2mは、微高地となるとともに、川石や土器等の遺物は全く出土せず、加えて足跡もあまり多くは認められなかった。このことは、微高地が硬くて足跡が残りにくかったからではあるまいか。土質は全く同じであり、浸水すれば柔らかくなり、足跡も明瞭に残存するはずである。それが認められないのは、東西に2号、3号の溝を掘削して乾燥するようにしたからではなかろうか。中央の微高地が水田として利用されたのであれば、溝中と同じような足跡が若干でも残存していておかしくない。想像の域を出ないが、道としての役割をもっていたと推定することも可能である。

今回発掘したⅢ区でも、発掘上必要な道は、歩み板を敷いて、これを利用していたことか

らすると、低湿地での通路確保には、このような溝を両側に掘削して道を作っていたのかもしれない。

今後、稲作に伴う低湿地集落の実態を明らかにするには、集落の主要な要素である集落と集落、家屋と家屋、更に家屋と水田とを結ぶ道を追求しなければなるまい。

図－20　3号溝状遺構の土器片の出土位置

（2）3号溝状遺構内の遺物の出土状況（図－20）

遺物の出土は少ないが、その遺物は溝床面に貼地状態で出土している。溝中央部の床面に数点と、集石遺構周辺と集石中に2・3点弥生土器片が出土した。これらの土器片は弥生前期前半のものであり、1号・2号溝状遺構と同様、住居址となんらかの関係があるとみてよい。

（3）3号溝状遺構内の出土遺物

出土遺物は弥生土器片が若干あるだけであるが、溝状遺構南部から出土した川石からなる集石も、自然に存在したものではなく、人為的に持ち運び込まれたものであり、遺物の一つと捉えるべきかもしれないが、ここでは具体的説明は省略したい。

①弥生土器（図－20の1～8）

器形を少しでもうかがうことができる土器片は、3号溝状遺構中の集石遺構北端から出土したものであり、他の2～8の土器片は、胴部の破片の一部とみられるもので、両面とも剥落が激しく、調整痕さえ残存していない状態である。器形がうかがえる唯一の1は、口径19cmで、口縁部がゆるやかに外反し、口縁部と体部の境が少し絞られ、上胴部が心もち膨らみぎみであるが、最大胴径は口径とほとんど同じとみられる。口縁部の形態からすると、弥生前期前半に編年的位置づけが可能な土器であるといえよう。

Ⅲ　総　　括

横田遺跡Ⅲ区で検出した住居址・1号～3号溝状遺構・土坑状遺構は、そこから出土した弥生土器のいずれもが、松山平野の第Ⅰ様式第1型式であることから、弥生前期前半期の一

集落が、この地に成立していたようである。

出土遺物からみると、住居址内から出土した縄文前期の土器片とサヌカイトのスクレーパー状石器は、本遺跡の住居址に伴ったものではなく、本遺跡周辺に縄文前期に属する遺跡が埋没していることを暗示している。本遺跡の南方の伊豫市片山遺跡から縄文晩期の土器が発見されているが、時期的に大きな違いがある。松山平野南部の伊豫市や松前町は、縄文時代前半の遺跡の空白地帯となっているので、周辺地域で縄文前期の遺跡の発見に努める必要があろう。

さて、本遺跡は弥生前期前半の単純遺跡であることは既に述べたが、遺跡立地や出土遺物等から二・三の考察を試みてみたい。

まず本遺跡の立地から検討してみたい。本遺跡は伊予灘から直線距離で2.5 km と離れてはいるが、標高は6.3 mと低く、住居址等の遺構面は5.7 mで、低湿地上に立地していることになる。基盤面も遺構上に堆積する土壌もすべて粘土で、礫等を全く含まないことがこれを証明している。加えて横田遺跡Ⅰ区（註８）並びにⅡ区で複雑に蛇行する河川址は、この地がほとんど高低差のない低湿地であったことを示している。本遺跡の１号溝状遺構は、発掘時点においては、湧水が豊富で、泉に近い状態を示していたが、これは水田に用水を入れる時期と一致していたための、水田の水圧によるものと理解すべきであるが、地下水が浅い部分にあることを物語っている。遺跡が本遺跡のように低湿地に立地するのは、弥生前期の低湿地での水稲耕作を考える必要があろう。それに伴って水田地帯に集落が形成されるようになったもので、そのようなムラの一つが本遺跡ではなかろうか。

２号・３号溝状遺構に挟まれた微高地は、道の可能性が考えられるとしたが、道の両側の溝中に残る多数の足跡群も、低湿地における粘土層の存在を示している。遺跡からは稲作を直接証明する遺構、遺物は発見されなかったが、立地からみる限りでは水稲耕作を主たる機能とする遺跡であることはほぼ間違いなかろう。特にこの地に形成された弥生前期の集落の規模は、横田Ⅰ区や片山遺跡（図－21）からの弥生前期前半の遺構や土器の出土から、かなり広範囲にわたっていることは明らかであるが、どうも遺構の分布は稠密ではないようである。

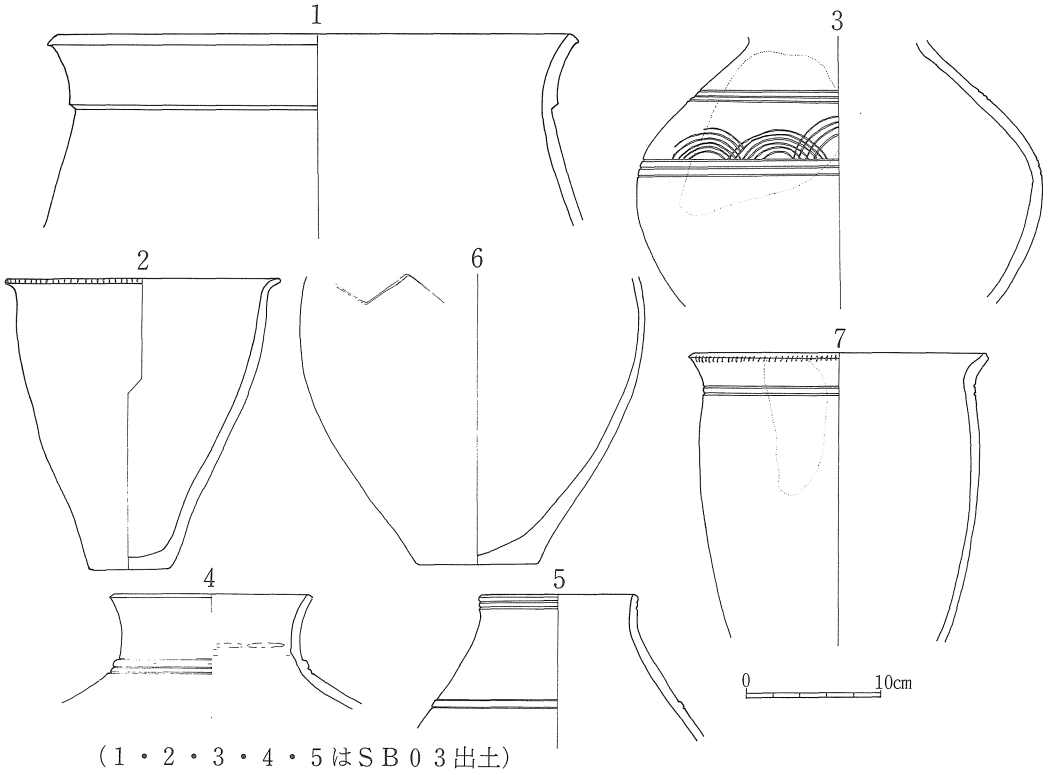
次に出土した遺構と遺物からみてみたい。遺構には不明な点があるが、住居址は検出した平面プランからみると、松山平野北部の文京Ⅲ遺跡（註９）などで明らかとなっている円形プランではなく、やや規模の大きな隅丸方形に近いプランではないかとみられ、同じ松山平野でも南部と北部では違いが認められるようである。松山平野では縄文後期から晩期の住居址が上野や久米窪田Ⅱ、船ケ谷遺跡のように小型の隅丸方形である（註10）ことからすると、これを継承しているのかもしれない。文京Ⅲ遺跡出土の甕が、口縁部に箆描き沈線文を２～３条もっていることなどから考えると、地域的な違いと捉えるよりも、本遺跡の住居址の段階まで縄文的であり、文京Ⅲ遺跡の段階で円形プランへと変化したとすべきかもしれない。松山平野では少なくとも弥生前期前半には、縄文晩期的な方形プランと弥生的な円形プランが共存していたと推定できる。

１号溝状遺構は、住居址東方からはじまっており、河川や用水路ではない。ただ、湧水が

豊富であったが、これを泉からの用水路とするにしても、東部の標高が高いことから、用水路としての溝ではない。溝の深さが浅く、溝の床面上から完形の甕や加工痕の残る割石や石錘、磨製石鏃の未製品、ミニチュアの磨製石斧が出土していることは、単なる溝でないことは確かであり、祭祀的性格を有する溝と片付けることもできかねる。今後、同じような遺構の検出を待ち、その性格を追及し、検討を加えても遅きに失することはなかろう。

出土遺物で特異なものはないが、土器の量に対して石器の割合がやや多い。石器には石鍬状石器や石斧があるが、石鍬状石器は稲作を考えれば当然であるが、稲作を間接的に証明する石庖丁の出土は土坑状遺構からのものだけであり、やや説得力に欠ける。刺突道具である実用的な石鏃や石槍が出土しないのは、水稲耕作から当然であるが、石錘が発見されていることは、河川での網漁ないし海での網漁が副次的におこなわれていたことを物語っている。偏平な緑泥片岩の石錘は、海での網漁の可能性が大であるが、県内では縄文後期から晩期に多く出土している。本遺跡Ⅲ区では弥生前期からの出土であるが、共通することは緑泥片岩が分布しない地域でも、あえて緑泥片岩を遠方から搬入し、使用していることである。その理由の一つには、緑泥片岩の海石や川石の形状が石錘に適していることとともに、その緑色が海水や川水の色と同じであることとも密接な関係があるのではなかろうか。ただ、石器からみても狩猟・採集が生活の中心でなく、生活の基盤は稲作農耕にあったが、季節的に狩猟・漁撈・採集などもおこなっていたとみられる。

最後に出土した土器についても若干の考察を加えてみたい。出土土器は甕と壺だけでの器種構成であり、鉢、高坏は出土しなかった。住居址から甕が７点出土したが、そのいずれも



図－21　伊豫市片山遺跡Ⅰ区出土の弥生前期の土器実測図

が最大胴径より口径が大きく、ともに口縁部が短く外反し、胴部の張り出しもほとんど認められない。口縁端に箆による刻み目をもつものが2点出土しているが、他の5点は刻み目をもたない。したがって、甕の基本形は刻み目がないもので、口縁端に刻み目をもつものは例外的存在である。口縁端に刻み目をもつ甕のなかには、口縁下に半截竹管文状工具で細く、浅い暗文風の沈線を施しているものがあるが、箆描き沈線文に先行する施文手法の一つとみてよかろう。この傾向は1号溝状遺構出土の甕でもいえることであるし、本遺跡Ⅰ区の試掘でも刻み目のあるものは出土していない。更に追試掘においても9点出土した甕のうち、口縁端に刻み目をもつものは1点だけであることから、口縁部の無文の甕が主体を占める時期が少なくとも松山平野南部にはあった可能性がある。

これら甕に伴う壺は、口頸部が大きくゆるやかに外反し、最大胴径が中央部にあって、口頸部から上胴部は絞られた形をしている。外面は全面箆研磨で整形され、口縁、頸部、胴部、の境には区画のための段、沈線、凸帯などをもっていない。

1号溝状遺構から出土した甕は大型で、口縁端は無文で口頸部と体部の境に下向きの段をもち、段上に刺突文状の刻み目をめぐらしている。住居址内の甕とは若干の相違はあるものの、同時期の甕とみたい。住居址や1号溝状遺構出土の甕・壺は、遠賀川系土器であるが、刻み目のある段をもつ甕は、縄文晩期の土器の流れを汲んでおり、松山平野では最も古い前期初頭の、第Ⅰ様式第1型式に属する土器群である。このような刻み目有段の甕は、すでに横田遺跡の試掘でその存在が明らかとなっている（註11）。試掘で出土した鉢も段をもっているが、甕、鉢とも下向きの段である。追試掘では壺の頸部にも下向きの段をもつものが出土している。特に追試掘ではこれら甕・壺に伴って縄文晩期末の鉢が出土しているので、前期初頭には縄文晩期の土器と弥生前期初頭の土器が共存していたのであろう。本遺跡では口縁部に凸帯をもつ甕の出土はないので、松山平野北部の朝美澤遺跡出土の口縁部に凸帯をもつ甕のあり方とは異なっている（註12）。

松山市西野Ⅲ遺跡では、段をもつ甕と削り出し凸帯と箆描き沈線文をもつ壺がセットで出土しているが（註13）、段は上向きである。セット関係からすると下向きの段が先行するようである。松山平野では、下向きの刻み目のない段をもつ甕が盛行する比較的古い段階に、すでに削り出し凸帯が出現していたことになる。松山市土壇原Ⅴ遺跡では有段の小型壺の近くから、木葉文をもつ小型の壺が出土していることから、木葉文も前期前半に出現し、前期後半まで存在しているが、すでにのべたごとく、壺の文様の主流とはなり得ていない。松山平野では、木葉文をもつ壺は極く限られており、土壇原Ⅲや土壇原Ⅴ遺跡ではともに前期前半の墳墓から出土しているので、墓前祭祀に係る特殊な存在の土器である可能性が強い。

松山平野では前期前半の土器として、重弧文とか連弧文と呼ばれる文様をもつ土器がある。本遺跡に南接する片山遺跡Ⅰ区のSB 03からも、重複重弧文を上胴部にもつ壷が出土している。重弧文は4本と6本があり、上下に各3本の箆沈線文を配して区画している。同じ住居址から頸部に削り込みによる段をもつ広口大頸壷と、削り出し凸帯と沈線文をもつ壷が出土している。これらから、段、重弧文、削り出し凸帯をもつ壷が同一住居址内で使用されていたことが明らかになった。ただ、これらにともなった甕の様子が今一つ不明であり、問題で

もある。片山遺跡のSB 03出土の土器や西野Ⅲ遺跡、土壇原Ⅴ遺跡出土の土器は、本遺跡出土の土器に後続するものであることは間違いない。ここでは本遺跡出土の土器を第Ⅰ様式第1型式に、片山SB 03・西野Ⅲ・土壇原Ⅴ遺跡出土の土器群を第Ⅰ様式第2型式に編年しておきたい。

松山平野では、第Ⅰ様式第2型式の段階で、甕に箆描き沈線文が、壷に重弧文、木葉文、段、削り出し凸帯が出揃っている。ただ、第Ⅰ様式第1型式の土器の様子は、他の時期に比べると不明な点が多かったが、今回、本遺跡で若干の資料を得ることができた。これらは、北九州地方の板付Ⅰ式土器に併行する時期の土器であり、愛媛県では最古の弥生土器と呼べるものである。今後は、低湿地での調査に注意を払う必要があろう。　　（長井・西岡）

註1．森　光晴『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』（伊豫市教育委員会）1993

2．長井数秋「弥生時代資料集成」（『愛媛県史』資料編・考古）1986

松岡文一「愛媛県下の磨製石剣」（『伊予史談』175・176 合併号）1965

3．長井数秋「松山平野の須恵器編年」（『愛媛考古学』12号）1992

4．註1に同じ

5．西岡信次・長井数秋他『大見遺跡』（大三島町教育委員会）1985

6．註1に同じ

7．長井数秋・米倉豊・八木武弘「松山市船ヶ谷遺跡の調査」（『考古学ジャーナル』112）1975

長井数秋「船ヶ谷遺跡」（『愛媛県史』資料編・考古）1986

8．杉木一正『横田遺跡』（松前町教育委員会）1992

9．松山市教育委員会編「文京遺跡」（『松山市史料集』第2巻考古編Ⅱ）1987

10．長井数秋・土居陸子「西野Ⅲ遺跡」（『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅰ）（愛媛県教育委員会）1979

長井数秋「久米窪田Ⅱ遺跡」（『愛媛県史』資料編・考古）1986

11．註8に同じ

12．梅木謙一・宮内慎一『朝美澤・辻町遺跡』（松山市埋蔵文化財センター）1992

13．註10に同じ